

1439/1111

序

加州に河波有道先生ありき、曾て先人の
 爲に水哉亭記を作り、中よ云ふ、夫物自無
 用而觀之、則天下無一不無用者、自其有用
 而觀之、則無一不有用者、今夫穢汗之物、人
 之所憎也、然田圃非待此物、無繁殖矣、金玉
 之珍、人之所愛也、然古今不籍此以招患害、
 鮮矣と。去月余墨陀の芳堤よ帝國大學春
 期競漕會を觀る。和田垣謙三氏卒然余よ
 謂て曰く、パラダイスロストありてパラ

三宅雄誌

ダイスリゲンドあり、ラレグロありてイ
ルペンセロソあり、子曩に發行停止に際
して**眞善美**日本人を刊せり、今復た停止
の厄よ罹る、豈よ**偽悪醜**日本人を出すの
意なきかと。余啞然として大笑し、而して
答ふる莫し、幾も無く小冊子の稿を口授
し畢れり、惟らく詩仙の妙趣よ擬するよ
鄙俗の陋劣を以てするも亦可ならんや
と。於戯ミューズ、吾爰う爾を煩さん、呵々。

一二十四年五月

三宅雄誌

凡例

- 一 本年三月一書を公にし、稱して日本人と云ふ。表紙に眞善美の三字を題せるを以て、時に眞善美日本人と呼はる。本書は之に對して偽悪醜日本人と名くるも、對照は豫期する所に非ざりしが爲め、全く關係を有せずと見做すも妨げなし。
- 一 國を爲すの弊多し、然れども其最も直接に影響あり、而して又最も矯正し易きは、政治に在り。但だ今日に方り政治の弊を言へば數々忌諱に觸るゝの恐あるを以て、姑らく忍で言はざるのみ。
- 一 本書は論旨の要領順序を内藤虎次郎長澤説の二氏に演述し、托して文字を成せり故に文字の責は二氏の負ふ所とす。
- 一 林辨次郎氏偶、其の作る「濁」一篇を寄示す、其の意旨必ずしも著者の意と合せず、往々相牴牾する者あり、特お其の間々時弊に切中する所あるを以て、加へて參照發明するの資となす。

目次

濁	醜	惡	偽
.....
六十五頁	四十五頁	二十六頁	五頁

偽惡醜日本人



老子曰く、天下皆美の美たるを知る、斯れ惡のみ、皆善の善たるを知る、斯れ不善のみ、故に有無相生し、難易相成し、長短相較べ、高下相傾け、音聲相和し、前後相隨ふと。ゾロアストルの宗旨には、光の神ヲルムズと暗の神アリマと宇宙を分領し、陰あれば陽あり、表あれば裏あり、以て萬象を通貫すると言ふ。是れ蓋し偶然あわず、有あれば斯に無あり、吉あれば斯に凶あるは、理の自から然る所なり。夫れ既に吉あり、而して凶あり、此を抑ふれば彼れ揚る、故に吉を揚ぐるは或は以て凶を抑ふるに異ならず見ゆることあり。耶律楚材が一利を興すは一害を降くに如かずといひしも、亦た豈に是を以て是るにあらずや。

然れども吉を揚ると盡く凶を抑ふると同一なりと爲すへからず。家を改修するは、家屋なる者あればなり、既に家屋なくば、何の改修をか要せん。唯々夫れ既に家屋の存するあり、而して改修するあらんと

すれば、今の改むる所の爲めには、前の成る所必ず障礙となり、大に増修するあらんとすれば、必ず大に破壊するあらざるを得ず。夫れ進歩とは絶えず新造するの謂なるが、絶えず新造するには、絶えず改修するを要す、其の新造するに當てや、必ず吉を主とせざるを得ず、而して其の改修するに臨むや、則ち毎凶を抑へざるべからず、吉の凶と相剋するや、寔に此の如きあるなり。我が國家、運方さに一新に屬し、事ごとく新造を主とす、されども因習千年、其の間亦陳々相依り、大に破壊して而して改修せざるべからざる者多々あるなり。故に之が爲に眞を揚げんには、必ず偽を破らざるべからず、之が爲に善を揚げんには、必ず惡を碎かざるべからず、之が爲に美を揚げんには、必ず醜と滅せざるべからず。

吉を揚ぐるは難くして、凶を抑ふるは易し。其の最も順正なる道は何如、吉を揚ぐるに如かず、若し及ぶべからずば、凶を抑ふるも不可なし。然れども他山の石、玉を磨くべく、凶は以て吉を進むるの力たること

あれば、頑空にして物をからんよりは、寧ろ其れ凶あれ。以て吉を揚ぐるに足らず、更に以て凶を抑ふる能はず、其の寂靜にして事なからんよりは、寧ろ凶を行へ。家屋を造る、主は新に造築するに在らん、而して次は其の無用不便の處を毀壞するなり、然れども其の新に造築するに於て、そらも故さらに加ふるに百種の妨害を以てすれば、爲めに其の建築の堅固を致すこと反て増すものあらん。未だ構へざるに、暴風之を倒し、未だ乾かざるに、暴雨之を壞る、災は則ち災なり、而も其の災や適ま以て建築の牢固を促し、盜賊隙を鑽る、禍は則ち禍なり、而も其の禍や適ま以て鎖鑰の嚴重を促すべし。泰西建築の宏壯偉大にして、牢固瑰麗なるは、其の嘗て雪深きの地に在り、而して掠奪盜劫の盛に行はれしが故なり。頑空寂靜、熱々として唯々泰平な樂まんよりは、困厄百端、鬪亂して而して勇往するは、啓發の因あり。老子の無爲を尙びしが若き、時を視て言を立つるなり。若し吉凶相ひ回互するを以て、寂然として偏らず、以て靜黙と守るは、眞意を得る者といひ難から

んか。然れども是れ萬已を得ざるのみ。

偽

少年あり、其の質や穎敏聰慧にして、以て偉器を成すに足り、而して好
良の學校あり、充實の師資ありて就て學ぶとせん、其の學術に於て大
に功を著はさんこと固より期すべからん。されど若し彼が父は頑に
して事理に濶に、知らぬ癖に學術の事に喙を容れ、不易の定理をも己
がまゝに狂けさせんと試み、加ふるに彼れが朋友は寄りてたかりて
只管に彼を遊惰嬉戯に誘ひなば、彼れたとひ理義を辨するの能ある
も、壓抑に屈せられ、外誘に擾さるゝの漸積、其の心を措くこと定まら
ず、靈慧の性も爲に昧まされて、爲すこともなくて已みなん。嗟我が日
本學術社會の現状は方さに是の如き者に非ずや。

悲い哉、我が日本人は理義究明の能力、未だ遽に白人に譲る者ならざ
るに、彼れの猶は遮へらるゝ所ありて、充分に其の能力を展ぶること
能はざるなり。蓋し封建制度、階級の制抑を破りしより、日を爲すこと

未だ久しからざれば、一新の後、驚くべき進歩の形勢につれて、學事の發達も目さむるばかりなれど、根柢深き階級制限の弊は今に全く芟り盡されず、今日小學より遞して中學、大學に到る、其の教職を待するは皆行政府の官等に準するなり。尋常師範學校の教頭が奏任に準せらるゝより以上、官立専門學校の教授は皆奏任なり、大學教授も概して奏任にして、其の尤も昇進する者は勅任たるを得。されど其の昇進する所は此に止まる、故に親任官と同等の地位に到らんことは、學世上の地位を以て能くすべきに非ずと畫られたり。而して其の官等に準するや、幾等々々と等級を分つこと、毫もかの純然たる吏胥の等級と異ならず、而して之と總ぶるは實に行政府の官長たる文部大臣なり。官等に離れて別に學位といふ者あり、學位令ありて博士大博士の位を定むれども、而かも學位を授くる者は亦文部大臣なり、文部大臣の指擲を奉じ、其の議に參して授くべきの人と學位とを評定するは亦先づ高等の地位を占めし輩なり、かくの如く學術世界の地位は皆

官等に準するの形蹟あり、以て政府の一附屬として、之に頼らざれば榮譽の地位を得べからざるなり。加ふるに世俗の學術を視ること亦頗る之を鄙むの風あり。世俗の言に曰く、理論と實際と、は並行し難し、理論に於て完全なりと稱するも、之を實際に行ふや、時あり處あり、其の完全を必し難きは毎々然りとなすど、かくて政府の吏事を司り、若くは會社の事務に當るか如きも、學理に通ずる者は、却て實務に妨わりと、下僚に沈滞せられ、閑地に放擲せられ、憂鬱不平に閉されて、活動の機會を得ることなし。殊に其の商業會社に在るが若きは、顧客に對する倨傲鮮腆、商業の駭引などには露ばかりも用に中らず、是に於て斷ずらく、實際の活世界に於ては、學術理論は些の必要なしと。又曰く。世は道理のみにて通るものにあらず、人情といふ者あり、曲折あり、纏繞ありて、道理の進路を左右するなり。然るを學問ある者は動もすれば、人情を顧みず、兀々として圭角ある理窟によりて、求めて紛紜を來さんどす。苟くも理窟をのみ之れ求めば、何事にか理窟の捏合すべ

からざる、少しく人情を融和せば事なくして圓滑に了すべきを、かの附會の理窟を簸弄して自ら喜ぶの傾きは、學問ある者の通弊なりと。

嗚呼學術社會が方さに處するの境遇は、實に此の若く憐れむべき者あり。さればにや、學術を攻むる者も、自から其の狀勢に制せらるゝの是非なき、學者にもあるまじき官等の昇級を希ふもの概ね然らざるはなく、徒らに地位高き者の尾に附て進むに營々たるなり。間々志尙庸ならず、官等の昇級には眼もかけず、専ら學理の講究を務めんとする者あるも、地位低ければ、研究の便宜も隨て悪く、便宜の善からんことを望めば、亦官等の昇進を望まざるべからず。學者の員數は年々に増殖し、而して官等に準せられて地位を得る者の數と度には限りあり、則ち地位を得んと欲する者、昇進を希ふ者、其の欲望の殷なる程、上官にありて己を進退する者の意向を候伺して之に順ふことを務めざるを得ず、其の上なる者亦更に順ふ所あり、究竟する所は何ぞ、文

部大臣なり、是に於て國內の學者を擧て、唯だ文部大臣の意向に背かさらんことを是れ務む。文部大臣何人ぞ、行政部の一官長として方略の才識あるも、必しも天下の大學者たるに非ざるべし、之が識に參し、之を輔翼する者は積歳の効を、量りて、梯を上るが如く進みし老朽一般の徒多からずとせず、是れ其れ何物ぞ。然るに勢力の在る所、抑も之を奈何せん、彼等の意向に従はざれば、其の地位に安すべからざるなり、されば純粹潔直あして餘念なき學者が、始めてかの階級的學術社會に入るや、新に沐する者の塵にまみれし冠を戴き、新に浴する者が垢しみたる衣着くる心地して、堪へがたき不快窮屈を感ぜざるに非ず。但だ夫れ居の氣を移すや、回顧の境遇に順應せることの常となりて、正義を踏て眞理を發揮せん決心も、混にすれば何時か緇み、磨けばいつしか礫ぎて、不知不識、自ら狂て虚偽の魔界に墮落するに至る。師範學校の若きは、唯だ有司の命之れ奉ずる所、言ふを要せざるべきか。大學の頗る自由に於て、地位低き者も割合に勢力を保し易きを以

てするも、儕輩の榮進を競ふ者多ければ、左顧右盼、地位の爲に心を擾れて、斷然として傍眼もふらず、學理究明に身を委ぬるを能はず、大臣の好尚は何如、總長評議官の意思は何如、自治か、干涉か、競々として之を覲定し、安ぜずして之を順ふの習ひ重なりて、竟お安んじて偽を眞として自ら怪まず。故に一般官吏に比すれば、心胸開豁にして、論斷公平に、必ずしも榮を助けて惡を爲さざる大學教授等にして、猶ほ何處もなく因循卑屈の風を帶ぶるを免れず、况んや之より以下の學校教職が心術の愈々鄙陋に傾くは推して知るべきのみ。精金美玉、市に定れる價あり。學位何物ぞ、而も之れを得るお熱中し、唯だ是れ幾年の後、定規の試験を受けて博士の位を得まほしさに、大學院に入る者あり。精研覃思何ぞ、特り大學院に於てせん、之に入るは所謂學位を得んが爲ならば、欲する所豈に學位にして止まんや、其の俗臭鼻を衝く等級の進退に汲々たるも怪むべきにあらざるなり。學士奔競の風乃ち爾り、昏々瞶々として、俗の等級高き徒に左右され、自ら枉げて眞偽を

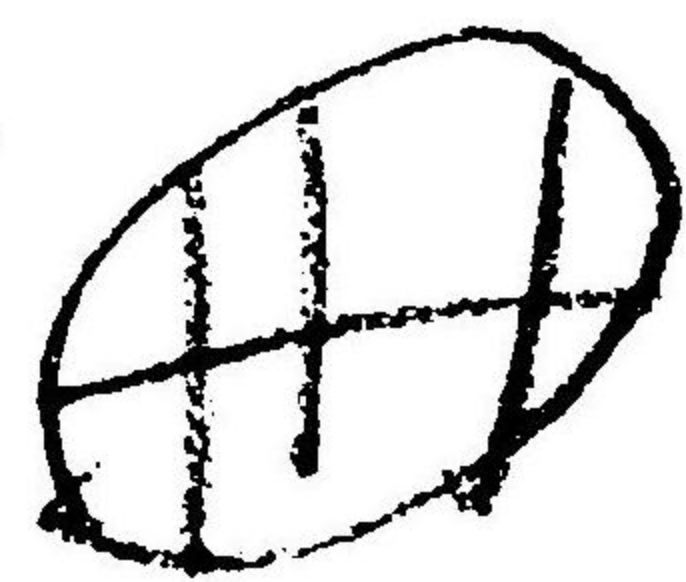
混淆し、而して漸く以て、下も専門學校出身の徒を風化し、師範學校よりして更に小學教員に及び、竟に以て幾百萬多望の幼弱子弟を風化し、天下を舉て卑屈陋劣の風に浸漸せんとす、歎するに勝ふべけんや。

且つかの理論實際背馳の邪説が流すの毒も亦た大ならずんばあらず。學理の蘊蓄纂めて厚く、精に詣り微に通ずるも、之を排して空論と曰へば曾て一文錢に値らず、宏遠精妙の理論を發揮して之を唱説するも、空疎迂濶として嗤笑せられて已むが故に、勢ひ進で之を爲す者なく、日常瑣屑の事情に順適して、以て實用を哀求す。官に在ては迂腐にして活用なきの學者と視られんことを恐れて、強て庸吏の態度を學び、足趨起し、口囁嚅し、上官の意を迎へて巧に之に投じ以て自ら才ありと爲し、嘗て學ぶ所に正して、意見の謬あるも、認ふるに實際の然らざるを得ざるを以てして、甘じて是非を顛倒す。始めや唯だ實際の必要に由り、枉げて之を是とする者、終には更に牽強して爲に理論

を附會し以て辨疏を試みて當然となせば、則ち至らざる所なきなり。商業會社も在るか若きは、學者といふ名稱は更に忌むべき者たれば、物慣れたる商人の風を粧はんとて、世辭を稽古し、さもなき事にも餘計の追従して得意とし、嘗て刻苦して職業に必要な學藝を習得しながら、遺忘して惜まらず、巧佞捷給、日又日を消するのみ、而して却て世才に長けたるに誇り、乃ち彼れ自からも又學術の實際に益なしと曰ひ、以て潤達を衒ふなり。道理人情の曲折に於けるも亦然り。必ず人情に通じ、酸も甘も嘗め盡したる粹人と云はれんことを希ひ、務めて圭角ある道理を避け、突梯滑稽、更み定見なく、行々以て鄙劣醜陋の行に陥没するも、人情已むを得ずとして、一時苟且の計に營々し、以て人を恕し、并せて己れを恕するは、亦太甚しからざらんや。木偶の如く機械的に動作する官吏、會社役員の若きは、咎むべきの數にわらずとするも、職に後進の教育に當る者だに、此風に浸漸して悔みず、益々以て偽徳偽理の横流を致す、滔々たる流俗、あゝ其れ之を奈何せんや。

弊害の横流は既に此の如くなれば、たとひ邦人の能力、白人に譲らざると雖も、學術の進路壅塞し、事理研究の便開けざる、眞を極むるの一路より白人の缺陷を補填して、一流の眞理を闡揚して、人類世界の進歩を助けんと、到底望むべからざるなり。今夫れ親父、其の子の教育を監督して、其をして放恣に流れしめざるは、固より其の職分ならん。されど學術日進の世に處して、其の子が習得する新學理、己れの知らざる所に喙を容れて、強て眞理を枉げしめて、順へば賞め、逆らへば責むるは、過ぎたりと云はざらんや。學術の發達も亦然るなり。肆まゝに極端の意見を主持し、急激の理論を唱道し、以て國家社會の秩序を害する所あるは、政府の之を制するは不可とせずと雖も、學術の理論は必ずしも政府吏胥の能く辨ずる所にわらず、又其の之を論斷するの權利ある者にわらず、豈に彼等が好惡に徇へて、眞偽を混淆せしむべき者ならんや。且つ師範學校の校長といひ、教頭といふが如きは、彼れ固より官長の命令に唯々として之れ従ふの徒、之を云ふも詮なからん、さ

れど大學教授の如き地位を以て、盡く官等に準じ、某教授は奏任幾等
 ぞ等級を定めて省廳の吏胥に均しく、學識いかに高きも恰も僅に書
 記官と上下し、異級の昇進によりて勅任に上るも、各省次官に對する
 に過ぎず、大臣親任官の資格は萬々望むべからず。學術を研精するは、
 官職地位に求むる所あるにあらず、其大臣親任官を望む所なきや固
 よりなり、されども其の修むる所の學術いかに進達して著大の功績
 を立つるも、之に酬ふる所の地位名譽は文部大臣の賜ものたるに過
 ぎずして、大臣お膝を屈して其の下に拜せざる可らずは、是れ豈に畢
 生身を委して従ふべきの價ある事とするを得んや、而して人間とし
 て不見識たり、學者として學術を辱しむる者とせざらんや。醫師お佐
 々木東洋氏あり、嘗て戯れに曾我中將に語りて曰く、若し軍醫たらん
 か、其の昇進を極むるも、纔に少將に比肩す、則ち生涯の功勞いかに大
 なるも、以て中將に當るに足らず、我れ豈に驕心必ず大將に當るの材
 わりと信ぜんや、さりながら一生を委して中將に當るに足らざるの



業に従ふは、慊らぬ心地せずんばあらず、我の軍醫たるを望まざりし
 は是が爲めなりと。今の學術社會に生息する者、能く此の言に爽然た
 るなからんや。之を總ぶるに學術の事は、務めて俗流を支配する官等
 位階の圈套を脱せしむるに如かず。政府の監督は唯だ其の放肆にし
 て秩序を濫すを制するに止め、學術に關する處措は、其の社會の自ら
 治むるに任して、吏務官司の事と全然岐分し、其の社會に在て最高の
 地位を占むる者は、樞密顧問官の類に准して政府の最高官に下らし
 めざるを可とす。學位の若きも、歐洲諸國の如く沿習の制を爲し、學術
 未だ進まざる時代の遺稱、今に於て猶ほ用ゐらるゝ者の若きは、其の
 實に副はざるも怪しむに足らずと雖ども、此間學位令の新に制せら
 れて、必ず幾多の學者をして之に當らしめんとし、而して之を評定し、
 之を授與する者は官吏たらば、たとひ其の撰にして當るも、頗る奇怪
 の觀なくばあらず、是等無用の舉、斷して之を廢除するを可とす。官等、
 位階、學位の若き無用の階級、學者の地位を定め、苟くも之なければ學

術社會に些の勢力だも得る能はず、學理研究の便宜、亦隨て乏しきを免れず、是れ實に今日學術の獨立を妨ぐるの要因たれば、此の弊習を掃蕩せんが爲に、學職の官等に準ずるを停めんことを建議し、位階を奉還し、學位を返付して、超然として俗世界を脱すべきは、方今大學教授等の當さに務むべき急となすなり。

且つ學術を專攻する者が、理論の實際と並行せずと云はれんことを恐れて、勉めて區々たる實際に順適せんとす、是れ大患なり。若し其の執る所の業にして純粹の學術にあらず、職務あるの事業ならんには、其の實際の狀態に順適するは其の所なりと雖も、斯の如き區々たる實際瑣屑の業務は、固より概括せる學理の應用を煩すに足らず。此の區々たる者に強て應用せんが爲に、高遠の實理を下して必ず之に就かしめ、以て其の吻合を求むるは、分を知らざる者なり、而して學理の實際に叶はずと輕斷する者の若きは、謬妄の至りなり。一時の趨勢に適應し、一場の事情を表明し、繁瑣なる統計を列叙して事實を辨明す

るが若きは、古今に貫穿し、東西に通徹して、精究確覈せる學理の證明に比し、果して大に價值ある者とすべき歟。理論の實際と合せずといふ、是れ固より信ずべからざるの言たり、何となれば理論なる者は正確なる事實を説明するの貫線なり、果して實際に合せざらんか、所謂實際の虚偽なるにあらずば、理論の謬妄なるに過ぎず、理論を精研する所以は正に此の謬妄を絶たんが爲なり。若し理論にして其の精を極めば、求めずして自から實際と一致せん、何ぞ枉て實際に合するを求むるの必要あらん。道理人情の斟酌といふが如き、是れ亦正を持する者の患ふる所にあらざるなり。眞摯の人情、誠實の人情は、必ず道理と合同す、道理の人情を離るゝは適切の道理にあらず、人情の道理に協はざるは秀優の人情にあらず。乃ち道理の外に於て人情といふ一傍逕を開く、宜なり人情なる語が常に鄙陋の病處弱點を蔽ふて、之が爲に分疏するの器なるや。欲望は人情なり、則ち繼くに盜奪を以てするも亦た人情ならずはあらず、人情にして恕すべくは、世間何の罪惡

か怒すべからざるわらんや。人情は實に道理を辨する力の進歩に促されて進む、惻隱の心、人の爲に身を捨ることあらん、人の爲にするは道理に通するなり、道理を知るの明徹せる、義務を感ずるの情を勵ますと極めて強く、人の事情を察すると己れの事情に於ける如く、人の難を觀ること己れの難を感ずるに異ならず、卒然として之に遇ふも身を捨て、之に従ふ、是れ人情の道理に促されて此に至るなり。人情の道理に協合すること此の如し、豈に之を以て道理を味まして、罪惡を教ふるの具となすべけんや。

抑も學術の不幸、此の境遇に沈論するは、學者の自ら取る罪亦多し、強ちに政府と世俗とを咎むべからざるあり。其の官位に束縛せられ、汚俗に超脱する能はざる所以は、彼等自ら上官及び世俗に對して其の品位を保つゝの能力なかりしのみ。彼等の曾て學術を専攻し、其の眞理を發揮し、上官の命に怖れずして自ら伸ふるの力あるべく、終生奔走して好官美俸を得んとを唯だ求め、得る者は此に満足し、得ざる者

は徒らに惆悵す、何ぞ外間の輕侮を受くるを怪まんや。彼等が唱ふる所の理論、其の實際と背馳するや知るべきのみ。其理論の高遠にして、直ちに日常瑣屑の事に應用すべからざるにあらず、彼等の能力に闕乏せる、杓子定規に一を執りて變ぜず、以て變轉無窮の境遇に適用するの道を知らざりしに之れ由る。道理を執て人情と背馳するが若きも、實に之有りき、一知半解の法律家、文法を舞弄して、故らに道理の至當を離れ、好で圭角を生じて人情を破壊せしが如き、其の例少からざるなり。凡そ此等の者は、皆學者の自ら裂れて其神聖なる學術の獨立を失ひし所以なり。然りと雖も去る者は咎むべからず、追ふべきは尙ほ將來に在り、徒らに過去の失敗に泥んで、學術の獨立を妨げ、上官の意向のまゝに左右し、世俗の毀譽のまゝに浮沈して、是非を顛倒し、眞を滅して偽を長せば、學術の發達それ何れの日か之を望まん。人類の以て下等動物に異なる所以は、正に其の智識の進歩に在りとす、則ち智識の進歩ハ人類の榮譽ある天職として之を勉め、眞を極むるの路

を開くべき所、是れ區々たる官吏と憤々たる世俗との制抑に屈すべき者ならんや。貧弱後進の國が、以て富强先進の國と並び馳せて、其品格を高むべきは、智識を磨礪し、學理を研究するより善きはなし、而して我が日本人の能力、恰も此に適當す、是れ以て勉むるなかるべからず、奈何せん抑ふる者ありて其の發達を妨ぐ、豈に速お芟除して大に伸張る所以を求めざるべけんや。其の任お當る者は誰ぞ、此に重ねて大學教授等が先づ其の官等、位階、學位を棄て、學術獨立の基を建てることを望む、因て延て諸學校に及ばず、庶くは學術社會を一新するの効、且夕にして辨ずるを得ん。

議會の喃喃、六百五十萬圓の經費節減は、其影響する所頗る少からずして、風塵の表に卓出せざるべからざる大學をも、遂に驅り立て、波瀾の中に入らしめたり。かくて曰ふ大學の經費良師を聘するに足らざるに至れりと、果して然るか。抑も今の帝國大學たるや、明治十年の以前に在ては、呼んで開成學校と稱せられ、其教員は大抵

外國人にして、其外國人たる、多くは師範學校の卒業生にあらずんば、基督教の宣教師なり、然らずんば、陸軍の退職士官なりき。故て以て學の淺く、識の高からざりしは、當然の事にして、且つ邦人に在ては智識淺劣にして、輒く彼等の力量を判別するを能はざりしかば、大金を擲て、彼が如き淺學薄識の徒を聘用し、上下共に謹み慎みて教授を拜聽したるなり、誠に己を得ざる次第と云ふべきのみ。其後開成學校は改め稱して東京大學と呼ばれ、明治十八年更らに革新して、帝國大學となれり。其間幾年々、校の内外學問著しく發達したるのみならず、遠遊して泰西に學び、歸り來て教師となりたるもの亦た少からず、且つ職員學生等に至ても久しく外人と交際し、を以て、彼等の力量を判知し、もの頗る多く、爲に外人任用の事に至ては大に意を用ふるの傾向を生ぜりとす。而して怪む、今日尙ほ外人の來て我が大學に教授となるものや、彼れに在ては、僅かに業を大學に卒へたるのみにして、學識經驗未だ見るに足らざる徒輩に

過ぎず。夫れ我が五分科の大學中、最も高尙探邃の理論を教授するは、文科大學に若くはなき筈なり、而して其の教授たる人物果して如何、彼のブッセを見よ、リースを聞け、彼等實に本國に在て僅に業を大學に卒へ、而して直に渡來したるのみにあらざるか。曰ふブッセは哲學者なりと、蓋し然らん、而かも彼れ實に課業に於てロツチエの哲理を學びたる哲學者に過ぎず、而して其人となり眞の哲學者にあらずして、寧ろ美術家となるの優れるあらんか。曰ふリースは歴史家なりと、蓋し然らん、而して今や大に力量の見るに足るものあるか。彼等の本國に在るや、大學の教授となる能はざるは勿論、學問に依て一身を立てんと欲するが如きは稍々過分の望と謂はざるべからず。而して幸運逢着して其の我れに聘用せらるゝや、惟に巨多の旅費を博取せるのみならず、月々三百五十金の月俸を得、且つ校内に在て頗る重要な地位を占むるを得。彼等の學藝既に斯の如く、彼等の爲に費す所既に斯の如し、是れ洵に學ぶものゝ爲に不便な

るのみならず、經費上又大に痴愚と云ふべきなり。好し之を忍ぶべしとするも、外國大學に對する面目を如何せんと欲するか。見よ彼の大學に在ては、員外教員とすらなりて教授を受け持つ能はざる徒輩にして、我が大學に來れば、一躍して重要な地位を占むると云ふこと、豈に体面に關する大ならざるとせんや。抑も外國大學の他國人を教師に聘用せるや、假令其人にして自國人の企及すべからざる學識經驗あるも、自國教師の上位に置かざるを普通の事なりとす、而して我れに在ては事全く之に反し、成るべく外人を優待して好地置を與へんと欲す。外人を優待せんこと素より癡事として非難すべきにあらずして、特に我が教員の識力が學生を信服するに足らざる時は、缺舌の人をして意味ありげに弄辨せしむると些の不可なしと雖も、莫大の金額を擲ち、重要な地位を與へ、而して凡庸の徒輩を聘用せんこと豈に事の宜しきを得る者ならんや。苟も三百五十金の月俸と重要な地位とを與ふとせば、秀逸の碩學を招

く能はざるも、猶ほ學識を富み、兼て教授の經驗に富める教師を聘用し來ると難しとせざるなり。鴻儒必ずしも多額の金を貪らず、聘するに其道を以てせば欣々として到來せん、是れ想像にあらざるべからざる事實なり。想ふに我が大學の外國教師にして眞學者らしき人物の來らざるは、又た決して故なきにあらず。蓋し我の教師を聘用せんと欲するや、先づ文部部内の吏胥を介して之を求む。吏胥の之を紹介するや、吏胥に縁故深きものにあらざるはなし、吏胥に縁故深きものは、亦必ずや庸流の人物にあらざるもの少し。是に於てか前日僅か學校を出てたるのみにして、數十金すら得るに容易ならざる徒輩が、忽ち三百五十金の月俸と重要な地位とを得、且や我國に來るあれば、生計の費用亦頗る廉なれば、吏胥乃ち自己に縁故深き人物を求めて之に應ず、嗚呼是れ洵に大金と地位とを擲ちながら、適當の人物來らざる所以なり。今、我が大學の外國教師中、評判よきはエツゲルトにして、斯人や我國に來る前、某會の會長

たりしと雖も、一度は本國に在て教授の任に當りしこともあり、敢て我が大學の教授として恥かしき人物にあらざるが、尙ほ且つ學識は其短處たるを免れず、他推して知るべきのみ。茲に何をブツセ、リースを詰責して自ら快とするの要あらんや。特にリースの如きは、研鑽力苦せば、他日嶄然として傑出するなきにあらざるをや。但だ經費既に足らず、而して良師得べからずと云ふものあらば、是れ大に非なり、苟も學問上にて良師を得んと欲せば、今の經費にして足らざるなし、只た外人の選擇任用如何と願みんのみ。嗚呼外國教師を今のまゝにして、而して經費足らずと云ふ、誰れか之を至理と云はん。至當の進歩あれば經費容易に増加し得ん、一國の品位を高むべき學術の事業を案出せば、六百五十萬圓の大半を割取するを得ん、憾むらくは多多益々辨せんとするも、多多益々辨むるの資格を欠けるを。

丈夫あり、休養憩息すること已に久しく、体力爲に勃々乎とて上騰し來るとせん。然るに誤て背理の見解を懷き、運動を害ありとし、尙ほ永く休憩するを以て心身を修養するに足るとせば、則ち如何。若し之をして尙ほ永く靜居沈坐せしめば、氣鬱し心塞かり、精神快々、身軀憊々として事を取る能はざるに至るへし。然れども人の世に處する以て爲すべきの業務なかる可らず、乃ち起て事に當らんとす、而して敢爲の氣なし、進て業を成さんとす、而して堅忍の力なし、是も於て酒精の興奮劑を妄用し、快活猛奮の風采を發揮し來り、頼て以て爲す所あらんとするも、只だ奈何せん、興奮劑を以て振起したるの結果や、徒らに脈搏の度數を迅速ならしむるのみにして、其体力と精神とに至りては、愈々益々衰弱の深淵に墮落するを免れず。噫嘻我國現代の狀況此に異なりとするか。已に衰弱せり、故に世界萬國虎欲狼貪、強大

なる者跋扈跳梁して、弱小なる者氣息奄々とし、公道は隠れて光なく、偽善横行して寰宇に遍らんとするも、爲に一臂の力を奮ひ、正義を主持して、之を四隣に伸はし、以て人類福祉の一部分を増進せしむる能はず、却て兇惡の迫り來るあらば、首を垂れ尾を動かさし、憊々焉として屈服せざる可らず、嗚呼これ我國現代の狀況なり。

想ふに我國の海外と争はざる幾世代、藤原、平源、北條、足利、利休、織田、豊臣は徳川と代りたるも、只面積二萬五千方里の島中に起仆興替せしに外ならずして、其外邦と兵陣の間お交渉せしは僅々指を屈するに足るのみ、室内に蟄居したると久しと謂ふべきなり。米國水師提督の浦賀に來るや、唐土、天竺、三韓の外世界別に國土のあるを知らざりし邦人は、皆な錯愕驚嘆し、茲に初めて亞米利加合衆國あるを知れり、かくて英來り、佛來り、露來り、白刃の下に恨を吞て地下に入りしもの幾百人、五箇の港は開かれて貿易場となり、三箇の土地は開かれて互市場となれり。夫れ斯の如くにして始めて海外と交通し、

來者拒まず、往者追はず、自ら稱して維新と云ひ、忽然として國家快活の勢力を現はさんとせり。これ猶は久しく蟄したるものゝ奮はんとを思ひ、久しく伏したるものゝ起たんとを思ひ、永く室内に盤旋したるものゝ庭園に運動せんことを願ふに異ならず。特に昇平三百年、士民擧て休息睡眠に飽き欠伸し居るに於て罷や。此時や正に是れ外國に向ふて充分の能力を伸張するに恰當せる時にして、勃々たる士氣を鼓舞煽動して、以て虎揚するあらば、一鳴して近隣を驚かし、再鳴して寰宇を驚さんこと奚そ期して俟つべからざらんや。乃ち勃々たる士氣は現はれて征韓の議となり、痛く朝野の人心を風靡し、敵愾の氣殷然として海内に充滿し、戰艦備はらざるも三軍海を絶て鷄林の地に旭旗を翻さんとせしに、不幸にして志や嘉すべく、才や稱すべくも、皮相上より歐米の形勢と觀察し、文明の真相茲にありと臆察せし三四の文臣、歐米の漫遊より歸り來り、盛んに非戰論を唱へて武を隣國に顯すは策の得たるものにあらざるとなし、聖聰を動かかし、同僚

を誘ひ、遂に躍々として毛髮の機會だにあらば、奮出湧騰せんとするの士氣を抑壓し去れり。斯の如く發揚せんと欲する士氣を抑へ、敢て發揚する所莫らしめしが爲め、世上の事々物々、壅塞礙滯して開達疏通する能はず、人心鬱々として愉まず、悶々とし樂まず、かくて内亂相繼て起り、江藤新平佐賀に死し、前原一誠萩に弊れしも、不平の徒與雜然として國中に散在せり。一火消えて一火燃へ、一亂鎮定して一亂起り、遂に西南戦争の大疾患となりて出て來れり、是れ皆な強て飛揚奮起せんとせし士氣を抑壓し、結果にして又た如何ともする能はず。かくて金額を擲つこと數千萬、人を殺傷すること數萬、僅かに鎮定に歸し、爾來幾年、天下の事業一に澁滯して更らに振起の勢なく、轉た志士をして北斗を睥睨し慨然として涙下らしむ。然るに泰西に於ける人口の過殖と、勞力の餘饒とは、年々歳々級數的に増加し來るを以て、彼等が方土に於ける事業と面積とは、之を容れて豐厚なる能はず。況んや彼等が冒険の志氣に富みて、其勢力を海外に伸張せしむるお

や、是に於てか彼等が勢力の東迫し來る、月に歲に其の益々猛烈なるを見る。然り、海外の形勢切迫し來るは應に現代の一大現象にして、我れ亦た猛然たる勢力を興發し以て之に當らざる可らずと雖も、而も今や体力衰弱萎靡して、事茲に出づる能はず、嗚呼、命窮せる哉。

既に外に向ふて勢力を伸張する能はず、乃ち内に顧みて運通を奨勵し、瀛車、凜船、電信、郵便等苟も頼て以て運通の利便を補助するの力あらんものは、悉く發達助長せしめんとせざるはなし。故を以て期年の間にして鐵路は四方に延長し、電線は空中に縦横し、熙々として文明國土の外觀を備へ、而して商人最も其恩惠を蒙れり。何をか商人と云ふ、抑も商人とは此地の物品と彼地に運搬して販賣し、彼地の物品を此地に運搬して販賣し、以て彼此を疏通するにあり、古言に商而通之と云ひ、商不出則三寶絶と云ひしは此れに外ならず。今や瀛車、凜船の便大に開け、運搬頗る迅速頻繁を極むるに至りたれば、西洋船載或は都會の贅澤物にして、一朝飛び去りて山間の僻村、海濱の鹵地に至り

漁翁村媪の玩弄となるもの少からず。夫れ運通の便や大に開けたりと雖も、天產物若しくは製造物に至りては依然として進歩發達することなく、幕府の世と今日とを比較するに、其優劣の較著なるものあるを知る能はず。實に今日の状況たる運通の利便のみ比較的發達して、運通せるる產出物に至りては伴ふて發達せず、所謂進歩の跣足、的の進歩に過ぎず。是れ即ち世間の一般に開通しながら、一般に不景氣々々々と唱ふる所以なり、嗚呼、病源全く茲に在り。是れ猶ほ氣の鬱結せるを解放せんと欲し、強て興奮劑を用ひ、以て血液の循環を速めたれば、皮相上一時は頗る快活の外貌を現はしたるも、漸々衰弱し憔悴して回復を可らざるが如きか。

血液の循環をして迅速ならしむること、必ずしも非なりとせず。只だ血液の循環を迅速ならしめんが爲め、悪性の分子を注入し、之が爲に精神及び身体に變動を起し、以て其調和を失ひ、整齊を失ふに至りては、豈に長嘆ふ堪ふべけんや。燒酒、ブランドーを用て以て心氣を奮興

せんと欲する者、往々此患を免るゝ能はず。夫れ瀛車、瀛船等を縦横に開通し、以て大に交通往來の便利を擴大するは、人の舉て慶賀する所、只だ如何せん、運通の利便急速に擴大し、而して運通すへき生産物の之に伴ふなく、而して交通の迅速利便なるが爲め、必用よりも幾倍か多数の商人を出すに至れり、此等の商賈や、物品を運搬販賣するよりも寧ろ高帽鮮衣、一時を瞞着し、空手にして大利を獲取せんとせり、これ滔々たる山師流にして、世人稱して紳商と云ふもの、即ち是れなり。抑も紳商とは何者ぞ、彼等名を公益に假りて私利を經營せり、有司に賄ふて官業を請け負へり、姦商なり、博奕商なり。彼等は秀てたる材能なし、唯だ權家に出入し、權家に結托し、世人の未だ知らざるに官府の内情を探知し、豫め法律政令の向ふ所を知り、市場の物價動搖せざるに乗じて算盤を撫し、機會一轉忽ち巨萬の怪利を獲取す。商賈の實なくして、富巨萬を積めるものは、實に彼の紳商なり。其譎以て法網を逃れ、其智以て愚民を惑はし大官を誘ふ。會社の起るあれば、彼等必ず其

の重役たり、拂下あれば先づ彼等が手中に落つ、其他彼等が勢力、處として及いざるなし、而して其勢力の及ふ所は悉く變して腐敗潰亂、惡臭紛々たる處とならざるはあし。嗚呼國家を腐敗せしむるものは、又た此の紳商なり。

今や貧民に教育なく、自家の地位と疑ふこと能はざるを以て、意氣激昂、志氣跳躍、黨與を結ひ異説を唱ふるなきも、月移り歳換り、顧みて自家の地位を明知するの日に至らば、彼等夫れ遂に何をか爲すへき、豈に他日と云はんや。想ふに紳商を抑制するにあらずんば、社會の百弊得て除く可らず。蓋し紳商の跋扈してより、真正着實に事業の爲に勉努力するものも、其勉努力に伴ふ丈けの利益なく、却て事に實際の事業に従はず、巧言令色、佞媚、權家の門に出入し、官府間に攀縁するの徒與の爲に、巨額莫大の利益を壟斷占有せらる。此れ奚を獨り商のみならんや、農や、工や、皆な舉げて然らざるはなく、勉勵の勞、酬の以て勞に當るに足るものなく、徒らに隙を窺ふ遊子の囊中を肥すに

過ぎず。嗚呼分配の偏頗、何物か焉れに加へむ。されば國家の爲め爲すべく、興すべきの事業、雜然として紛出するも、心身を擲て事業の爲に罷勉し、事漸く緒に就き、利漸く擧るに至れば、忽ち多福ある紳商の乗る所となるを恐れ、以て興すべきの事業を興さざるもの豈に絶無なりと謂ふべけんや。嗚呼事業の發達せざるは、紳商の跋扈にあり、紳商は事業を獎勵する所以の者にあらず。今や政府の率先前導して計畫せる事業にして、今日の國家民人に必需緊要なる事業あるも、天下民人の異口同音に論難攻撃するものある、抑も何に依て而して然るか。他の故なし、唯た紳商の結托して陽に陰に悪性の分子を容るゝ所あるが故なり。又た軍事上國家の危急を知了し、步騎砲工諸兵の兵員を増加し、砲臺を増築し、戎器を精選し、糧食を山積し、所謂帶甲百萬、積粟如山、四方の邦國をして隙の以て乗すべきなからしめ、或は甲鐵艦を増加し、巡航艦を増加し、通報艦を増加し、水雷艦を増加し、軍港を増築し、大砲を購入し、士官を選擇し、水兵を練操し、四方の邦國をして望て

以て逡巡退縮せしめんと欲し、就令然らざるも平和一朝に破れ、幾許の敵艦、舳艫相接し海を蔽ふて而し來り、劍光沿岸に閃き、砲雨邊海に降り來るあるも、更らに周章狼狽の色なく、農夫は隴畝に耕し、商賈は市上に賣り、天下國家をして平居暇日の如くならしめんが爲め、爲に歳入を高め、經費の増加を企圖せんとするも、國民の之に向ふて同情を表はし、必用を感するなく、却て哂々罵々として論難攻撃するは、抑も何に依て而して然るか、紳商の姦智乘して以て聚集せる金額の幾分を消糜せんと企つるを恐るゝに依るにあらずや、軍備擴張の擧らざる紳商其責に當らざる可らず。蓋し紳商の社會に在るは、猶ほ腦中の血液に悪性の分子の入るが如きか、苟も腦中の血液にして悪性の分子の入るあらば、考察力を痴鈍ならしめ、理解力を痴鈍ならしめ、遂に貴重なる腦漿をして迷誤し錯亂して用ゆべからざるに終らしむ。紳商は社會の惡分子なり、有司と通ずるに因て政府迷誤し、社會に跋扈するに因て邦家錯亂せり。之を要するに、皮相上歐米の文化年々歳

々に膨張し來るの外觀あるも、實際の事業進歩せず、民人衣食の度依然として上進せざるのみならず、却て年々歳々幾分つゝ低落し來り、貧民窮氓從て増加し、年一年次第々々も國力の衰弱せるは、瞞過すべからざる現代の實狀なり。此の衰弱せる体力を以て海外も當らんと欲す、猶ほ病者を騙て壯夫に向ふが如きのみ、誰れか其の危難と危ぶまざらん。而して國家をして此極に至らしめるものは、彼の紳商の與て力ある所とぞ。然りと雖も紳商をして此に到らしめたるは、曩に教々たる士氣を抑壓して發揚せる能はざらしめたる姑息主義に基かずとせず。

概して論ずるに、不景氣々々々の嗟聲四方に喧しく、國力年を追ふて次第に衰弱に傾向するは、運通の利便一時に膨張し、而して運通の利便膨張したる丈け、運通すべき物品の産出せざるにあり。是に於てか氣徒らに勞れて前途頗る遠く、轉た悵然たるもの少からず。而して最も社會を傷へるは、彼の悪性の分子たる紳商の跋扈にあり。然らば則ち

邦家隆興、國力振作の長策として、今日に施行すべき大急務は、社會の惡分子たる紳商の掃除にあり。之を爲すの方如何。曰く、細大漏すなく彼等が賤むべき、惡むべきの内情を天下に暴白し、天下の人をして彼等が醜陋を明知せしめ、彼等如何に醜々たる家屋を建築し、燦爛として室内を裝飾するも、如何に鮮帽を載き、鮮衣を穿ち、八字髻を生し、金時計を輝かし、車は流水の如く、馬は游龍の如く、揚々として馳り廻すも、紳商は眞商ならず、卑陋の種族なりとなし、之を擯斥して大に勢力を社會に得せしめざること、尙ほ明治以前に於ける豊富なる穢多の如くならしむるにあり。且つや現今の撰擧法たる、徒らに狹隘に失して富者若くは虚假にて富者を装ふの徒に便し、讒見あり、才幹ありて、正眞に事業に匪勉するも、些々たる資格の遮障する所となりて雌伏せるもの豈に僅少なりとせんや。宜しく撰擧、被撰擧兩權の範圍を擴大し、以て暴富者と偽富者とを抑壓屈服すべきなり。嗚呼紳商を抑制せざれば實業振興せず、實業振興せざれば、不景氣挽回せず、不景氣

を挽回するの策、茲にあり、國富を増すも策、茲にあり、國權を伸はすも策、茲にあり。

封建の制度は人心を陶冶するに於て極めて必須なり。人類の未だ發達せざるや、其の遞互協合の情に乏しき、強て而して之を迫るゝるに非ざれば、以て其の結合を牢うすべからず、是に於て兵戈絶間なく、單なる者は敗れ、衆なる者は勝つが爲に、此に一團、かして一團、兵力武斷に強制されて結合体を成し、而して數結合体を一團として之を統ぶる者、而して又數大結合体を一團として更に之を統ぶる者を生じ、遞して上り、遂に全く一國人民を統合して、此に一大範圍を形くり、恣に藩籬法度の下に出づるを得ざらしむ、是れ封建制度の常態なり。一人の私利を輕じて、他人の爲にし、邦國の爲にするの思想は、斯に始めて薰養育成せらる、所謂士風是れなり。封建時代の士族は、一般に義勇の風を崇尚し、國の爲に一人の爲にするの美德を具有せる者たり。後世に及びて國民の德義風尙が尊ぶべき

の資を備へたるは、概するに往時士族の風尙が推擴して普ねく全人民に及びせしなり。其の業の商たり、工たり、農たるを論ぜず、其の志尙の尊くして、品格の高き者は、皆かの所謂士風に薰染するに由る、泰西のセントルメンと稱する所の者は、實に封建時代の士風を傳承し、之を薰染せし者にして、其の或は商賈の業を執る者と雖も、彼れ皆な私淑する所あり、務めて士風に嚮往せり。米國の拜金に熱中する、人皆其の徒らに個人の利害に汲々として、政治の若き公共の大事は實に腐敗を極めたるを道ふ。されども親しく其の内地に入り、地方農民の状態を察すれば、彼等が自重に篤き、實に此間士族の氣風を存する者あり、而して欠く所は吾が士流の虚誇驕傲の習のみ。故に其の氣象の高尙なる、毅然として天下の大事を以て自ら任じ、眼中大統領、國務卿なきの概あり、放任自由の太甚しき、斯の邦の若きを以て、其の建國の根本牢固にして、日に強盛を致すは、美德の深く民心に根する彼か若き者あればなり。然らずして拜金の醜

俗、果して其の國風たり、商工の業を執る者にして、皆な所謂町人根性の外、一も高尙なる特質なからしめば、四分五裂、潰散の極、反て榮顯專壓の徒に統制せらるゝや久しからんのみ。吾が邦に在て往時封建制度の整備は實に完美を致し、士族の風尙美德を薰養せしこと數百年、一旦事あれば、皆一身を擲て公共の爲にし、死を視ること眞に歸るか如くなりしなり。是を以て始めて外國と交通し、國情紛々として、天下皆其の危急を憂ふるや、士人の奮發挺進して國家に效さんと欲する者、爲めに死ぶ就く者勝けて數ふべからず、繼で維新の改革を成し、因て而して新事業を企圖すること踵を、接し、今日に至るまで身を公事に委して、經營奔走し、以て一世に勢力を占むる者は、皆士族なり、士風の國家に重すべき所以、洵に此の如き者なり。切に怪む近日士人が、浸やく務めて町人の風を學び來るの傾向あり、其の衣服、其の態度、皆殊さらに簡嚴謹整を去て、町人の靡浮灑落を爲し、以て得々として自から喜ぶの風あるを。但々かの豪紳鉅

商といふ者の若き、漫に自ら尊大にして華族の驕慢に倣ふ者間々之ありと雖も、又貴顯といひ、華族といふ者も、其の交際應酬に於て務めて鄙俚の商人を學ぶの風、一般に行はるゝ所なり、士族の種に出る者にして、伶俐慧敏の目ある者は、彼れ必ず商人の風を爲す者たるの狀あり。此の逆施の形勢、果して何の由る所ぞや。蓋し封建の制度、三百年の久しきお彌り、無事昌平にして、人心の鍊磨を缺き、弊害の積習、漸やく上にして裕なる者は日に愚なるを致し、幕府初政お方りて、活潑に機務を裁決せし老中の若き、諸大名以下の若きも、其裔孫は皆婦人の手に生長せし纨绔の子弟たり、漠として世事を解せず、徒らに下僚の成を仰ぐのみ。故に幕府の形勢、方さに一轉して維新の改革を促がさんとするに際しては、其の事に當り務を處するに堪ふる者は、僅に薄祿下等の士族、若くは足輕の類に過ぎず。此等賤士、足輕が其の上を視て其の暗愚を嘲けりしや久しかりしを以て、其の一旦志を得て、自ら天下を料理するの地位を得るや、

甚だかの茫々然として鼻を穿たるゝ醫上流の迹を襲ふことを嫌厭し、慧敏輕快おして直に効果ある商賣の徒と好で交を結び、而して自から其の風に感染せらるゝを致せり。加ふるに維新改革、士族の事一たび終るや、餘勇未だ索さず、沸騰の情、道を待て之を發洩せんことを欲し、直ちに志を海外に聘せ嚮者内國局促の觀念を擴大にして、日本國家といふの觀念となし、大に敵愾の念を鼓して、千里の足を伸べんとせしも、端なく征韓論の一挫折に逢ふて、此の壯大なる觀念感情の、節々に抑屈に竟へしめられたれば、折角に激發せられたる、國家公共の事に赴くの天氣の、之を用ゐるに處なく、日銷月磨、次第に姑息に流れ、斯に腴肉の歎か堪へざるの輩をして、己むなく商賣投機の業を學び、以て聊か其の力を用ゐんと欲するの念を發せしめ、士人の心腸は益々以て、商賣私利の感染を受くることゝなれり。今や顧みて前時の來路を視れば、茫として認むべからず、自ら其の立脚の地を視れば、氷を履み薪に坐するの思あり、乃ち國

を擧て絶呼して、國家の元氣餒えたりと嘆息す、其由る所實に歴々として指すへきを省せず、而して周章したる眼には正しく物を認るへからず、之を濟ふ所以の策に、於ても、倉皇として爲す所を知らず、慨すべき哉。夫れ今代の商業の世なり、財利の世なり、商業固より重く之を視ざるへからず、然れども今日の我邦に於ける、所謂商人根性を以て、大に商業の世界に振ふあらんとすれば、至難といふべきのみ。目前の小利に汲々として、左支右吾、鏽を贏し銖を剩す、是れ豈に世界に濶歩する異邦商人と競争して大利を博得するの材ならんや。今や利口小慧の徒、一世に充填す、若し商業を談するに當りて、國家といふことを以てせば、人皆笑て空論とし、嘲りて過大とするを常とす、然れども若し事業の始終を大觀して、更に大に我が商業の規畫を擴大し、かの異邦商人と馳騁せんとする者あらんか、往時士族が一身を委して國家公共に盡すの心を以て心とするにあらずば、能くすべからざるなり。其爲す所にして零利を拾ひ、人餘を

趁ひ、屑々として労働し、外觀の醜陋なる、支那人の若くするも可なり。外觀の醜陋は必ずしも、士風義勇の氣を失ふ所以にあらず、要は其の目的とする所、公にあると私にあるとの別のみ。支那人の世に厭嫌せらるゝを以てすも、其の商業に於ける、能く約束を守り、異邦萬里の途に流浪して、堅志事に當り、財を殖し産を興すこと、此邦の所謂商人風なるものと大に逕庭あり、其の白人に畏懼せらるゝは決して故なきにあらず。嗚呼商業の世、財利の世、國家の元氣を維持するは、唯々商人が往時士族の風尚を以て事に従ふに在り。但々夫れ趨勢の奈んどもするなき、此の風尚を興すも亦た人力の能くする所にあらざるの疑あり、是に於てか此の元氣を發揚するの策を講ずる者、或は曰く、姑らく末節に拘々する勿れ、唯だ外國と戦ふに在るのみと。戦は危道なり、豈に漫りに欲すべきものならんや、而も且は戦の欲すべきを道ふ者は、其れ見る所なからんや、幾を知るは其れ神か、嗚呼幾を知るは其れ神か。

醜

輕薄女子あり、輕薄男子戯れに之に謂て曰く、卿が容色天下に類なからん、假令然らずとするも温乎たる卿が目、藹乎たる卿が眉、世間豈に多く其類を看るべけんやと。一片の贅辭忽ち女子の心を宇宙に飛ばし、得意揚々、自ら以て絶世の美人となし、鍍金の鈿釵を挿み、鍍金の指輪を飾り、衣帯はなるべく人の指目に留るべきものを欲し、故らに言語を装ふて優美の風を示さんとし、故らに歩行を品やにして人の顧盼を得んと欲す。若し夫れ傍觀者より一瞥すれば、いやめかしき事限りなく、其外形の鄙陋、其精神の鄙陋、焉んぞ嘔吐を催さざらんや。而も輕薄女子自ら以て好しとなし、顔色は裝飾と共に燦然たる光彩を放つとなし、以て稠人廣座の間に出つるも敢て人後に落ちずと思ふ、豈に言ふに堪ゆべけんや。想ふに我國現今の美術たる、頗る之に類する所なきか。

今や美術の語は天下を風靡し、美術と云へば何となく人をして神聖高尙なるが如き思あらしめ、爲に美術を愛好すと言ひ、美術の製作に従事すと稱すれば、轉た世間の俗物をして、開化超乘したる人物の如く思はしむ。然れども靜に美術とは何ぞや、何物を指して言ふかと問ふに至りては、確然として明解し、明指するものなく、只た屑々たる兒戲同様の者を目し、茫乎として美術々々と稱道し居るに過ぎざるなり。されば髪を撫で付け、羽織の折目正しく、抜き頸に澄まし込み、而して以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。ずとぶりたる大黒天、或は二王等の彫像を見、譯けもなく妄りに譽め立て、煙草入れの飾り少しく奇雅に馳せ、舌切雀の金具あれば忽ちひねり廻はしる文句を並へ、床間に文晁の畫幅を掛け、柳の枝にても生け置けば奥ゆかしさなどさめきりて以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。風の神や、觀世音や、羅漢等の繪畫を見て只管に感服し、或は筆鋒を無遠慮に揮ひ立て、人にや案山子にや殆んど區別のなき者を稀有の名畫と感賞し、而して以て美術的思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。パイオリンやピアノの朗々嚙々響くを聞き、只た鼓膜に觸るゝのみにして、精神には何の感動をも起さるに、頗る感動したるか如き顔色を装ひ、而して以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。文字も練らず、趣向も練らず、思想に至りては固より卑陋下劣なる書き流しの短篇小説を讀み、文字が何、意匠が何、思想が何と利口氣に半分冷やかして批評めかし、而して以て美術の思想に富めりとなす者鮮少なりとせず。嗚呼豈に鮮少なりとせんや。これ皆な美術の思想に富めるが如き外見を装ひ以て世間を誇らんと欲する徒與にして、滔々天下正に此の探淵に墮落せり。且つ美術家と稱せらるゝ徒輩に至りても、亦た何ぞ之に異ならんや。試に見よ、鑿鉋等にて木材を削り立て彫り返へし、以て一箇の像形を刻み舉げない、忽ち彫刻家と賞賛せられ、繪具の使用法を心得、畫筆の運び様を覺へ紙に向ひ、少く勿体つけて、すら／＼と線を引き來り、さら／＼と彩色を

を稀有の名畫と感賞し、而して以て美術的思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。パイオリンやピアノの朗々嚙々響くを聞き、只た鼓膜に觸るゝのみにして、精神には何の感動をも起さるに、頗る感動したるか如き顔色を装ひ、而して以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。文字も練らず、趣向も練らず、思想に至りては固より卑陋下劣なる書き流しの短篇小説を讀み、文字が何、意匠が何、思想が何と利口氣に半分冷やかして批評めかし、而して以て美術の思想に富めりとなす者鮮少なりとせず。嗚呼豈に鮮少なりとせんや。これ皆な美術の思想に富めるが如き外見を装ひ以て世間を誇らんと欲する徒與にして、滔々天下正に此の探淵に墮落せり。且つ美術家と稱せらるゝ徒輩に至りても、亦た何ぞ之に異ならんや。試に見よ、鑿鉋等にて木材を削り立て彫り返へし、以て一箇の像形を刻み舉げない、忽ち彫刻家と賞賛せられ、繪具の使用法を心得、畫筆の運び様を覺へ紙に向ひ、少く勿体つけて、すら／＼と線を引き來り、さら／＼と彩色を

附し去れば、忽ち畫工と賞賛せられ、ピアノの鳴らし方、琴の鳴らし方を一知半解せば、忽ち音樂師と賞賛せられ、戀ひたりとか、戀はれたりとか、美人とか、才子とか何人も知れども口にするに忍びざる男女の痴情を記載せば、忽ち小説家と賞賛せらる。嗚呼何ぞ美術家となるの容易簡單なるや。

抑も美術とは美の觀念、内に醜勃して、而して知覺に通徹する者にして、觸視兩覺に發出するを彫刻とし、純一に視覺に發出するを繪畫とし、聽覺に發出するを音樂とし、而して盡く意想に收納して衆事を關連するを詩文とするなり、而して其の由つて來る所を採擇せば、宛も萬川流れ來て一海に入るが如く、彫刻の美や、繪畫の美や、音樂の美や、詩文の美や、悉く收めて一の觀念に歸せざるを得ず、之れを放ては發して種々の美術となり、之を收めば潛みて一の觀念に歸す、美術の由て現はるゝ所蓋し之れのみ。故に若し夫れ作家にして、美の觀念内に醜勃するなく、而して外徒らに美術の形狀を擬するものは、宛も鍍金

と同一にして、外面に於て光彩燦爛たるも、其實焉んを取るに足るものあらん。苟も其實取るに足るなからんには、零雨寒雲忽ち放擲せられて、講者の一顧にだも直せざるは知るべきのみ。嗚呼、觀念の内に鬱積するなく、而して彫刻と稱して徒らに木材を彫削し、觀念の内に鬱積するなく、而して繪畫と稱して徒らに紅緑を塗洙し、或は音樂と稱して徒らお聲音を放出し、或は詩文と稱して徒らに文字を排列す、是れ醜婦にして白粉を塗り付くるなり、乞食にして錦繡を纏ふなり、愚人にして才子振るなり。據其據にあらず、位其位にあらず、忘りに虚粧空飾し、鍍金を輝かして、以て世に誇り、以て自ら喜ぶは、其醜体洵に憫笑に堪ふべけんや。

想ふに美の觀念たる、自家の腦奥より湧出し、他人の有せる觀念と相接續し、相合同し、茲に始めて充足の情懷を得。今や雄偉、高壯、温藉、巧妙、仰て欲すべく、就て親むべき美術の發現なきを以て、已を得ず、觀者に在りては、今日のものを以て甘心せざるを得ずと雖も、豈に其識力の

進歩せむことを冀望せずして可ならんや。況んや作家に至りては奮發淬勵、大に進涉發達せんことを冀望せんばあらず、作家等其れ悠々として消光せべけんや。抑も雄邁の作家たらんと欲せば、雄邁の手腕なかる可らず。若し夫れ彫刻家ならんには、鑿鉋等の使用に熟達せむことを要し、畫工たらむには、畫筆の運用に熟達し、兼て巧に色彩を辨分するに熟達せざる可らず。音樂師に在りては、指頭の運轉、敏捷巧妙にして、兼て音聲の清朗爽快ならんことを要し、詩文に至りては、巨多の詞藻を肥臆し、縦横自在に之を駢列し、以て少しも困窘の色なきを要す。只た是等の技藝たる、天賦の才能に屬し、強て學むて以て達し易からざるあれば、幸おして是等の才能の賦與せられたるものは、愈々益々其能力を發達せしめざる可らず。然りと雖も單お鍍金的に外部の能力のみを發達せしめたりとて、未だ遽に可なりと稱する能はず、宜しく内部より意想を富まし、觀念を富まさむる可らず。乃ち苟も彫刻家にして英雄の肖像を彫刻せんと欲せば、須らく英雄の意想を

洞察する程に英雄を知らざるべからず。然らすんば焉んぞ以て肖像の眉目をして躍然たらしむるを得んや。畫工にして山水の光景を描畫せんと欲せば、徒らに線の曲げ方、延はし方のみを醒醒せずして、十分に山の巍然として立ち、水の溶然として流るゝの勢を感得し、腦中先つ一箇山水の好粉本を備へ、而し後に筆を下だすを要す。澎湃轟厖たる海波を描寫せんと欲するが如きあらば、仔細に其呑天沃日、鯨を奔らし、虬を駭かすの勢を感得したるの後に於てせざるべからず、若し然らすんば焉んぞ以て觀者の心目を動かすを得んや。音樂に至りても聽者の感情をば其心胸の奥底より呼ひ起し來り、之をして躍々として飛動せしめ、以て奏者の感情と同一ならしむるを要す、果して斯の如くならんには、奏者にして先つ自ら充分に感動せざるべからず。小説に至りても苟も卓絶出色の述作をなさんと欲せば、得意失意、悲痛歡樂、種々様々の堺遇に出入するか、然らすんば活眼を開て人情の動作變轉する處を洞察分析せざる可らず。若し然らすして淺薄に

人情世態の外面を瞥見し、依て以て不朽の大作をなさんと欲するものあらば、愚にあらざれば則ち狂なり。亦た彼の徒らに古語雅言を記臆し、意想もなく、觀念もなく、捏造し捏造したる詩歌俳諧の如き、焉んぞ以て同胞たも泣かしむるを得んや、何ぞ況んや鬼神をや。諺に曰はずや、詩を作らんと欲せば作者自ら詩中の人たらざるべからずと、是れ實に内に辭積せる所と外に發現せる所と相一致するを要する謂にして、美術家たるもの皆な然らざるべからず。抑も純金とい、内部外部共に純一無異の金質を稱呼せるものにして、徒に其外面にのみ金箔を展包するは、是れ人を欺き、兼て自ら欺くものにして、醜極れりと云ふべきなり。然らば則ち苟も美術家たらんと欲するもの、皆に區々たる手腕の熟達のみを務めずして、大に意想を之れ鍛練せざるべからず。而して意想を鍛練せんと欲せば、常に心を世界の形勢及び萬有消長の事態に着け、精密仔細に之を觀察するを要す。若し又た一室に閉居して真正の美術家たらんと欲せば、誠心誠意、神解默通、心と眼

とを古來事物の最奥底まで透入し、古來事物の精神と自家の精神とを一致協合せしめ、滾然として別觀念の迸出に來らんことを求めざるべからず。彼の小人黨を作りて咫尺の天地に醜礙し、世態の隱微に通せず、世界の趨勢に通せず、萬有の消長に通せず、古來事物の精神に通せず、少しく前人の糠粕を嘗め、古人の胡蘆を畫くのみにして、意想もなく、觀念もなく、區々たる手腕に依頼して得意自ら欣ぶ者の如き、焉んぞ以て美術家の名稱を授與するを得んや。盖今の所謂美術家と稱せらるゝものを見るに、多くは卑陋賤劣の徒與にして、目して以て眞の美術家と稱するに足るなく、一見人をして不愉快の心を生せしめ、二見三見、人をして嘔吐を催さしむ。是れ其の強て外面を美術的に塗抹するのみにして、美術家其の人の生涯と觀念とは美術中の人にあらざして、俗寰塵裡の小才子、小細工者なればなり。故に心あるものより之を見れば、彼等が自ら詫して美術家と稱し、世人の之を許して美術家と稱するは、洵に言語同斷の到りにして、寧ろ醜術家と云ふ

べきなり。

彼のヨケル、アンゼロを聞かずや、鑿を取て大理石に向へば、精神躍々として休外に溢れ出んとす、些小の鈍角を缺く可き所に眉目高く張り、口唇堅く結び、全力を注て鑿を打ち下す、工成りて之れを熟視すれば、雄偉優越殆んど活動せんと欲するの勢あり、是れ他の故なし、先生の生涯觀念の美術的の生涯觀念にして、畢生の力集て茲に在ればなり。彼の古法眼元信が泉州一國寺に一椀と二十五鶴とを止めし人の噴々する所なり。先生の畫師として此寺に来るや、寓すると三年にして一畫をも作るあらず、主僧怪んで故を問ひ、且つ曰く拙僧固より先生衣食の費を厭ふにあらずと雖も、事少しく解すべからざるものゝるを以て敢て問ふのみと。先生答へて、年來の謝恩として何物か畫く所あらんと欲すと云ひ、而して五六日を經過するも尙は未だ筆を下すを見ず。一夜更闌にして、離僧、主僧の許に來り謂て曰く、畫師の舉動怪むべきものあり、主僧願くは之を見よと。主僧乃ち往て先生の室

を窺ふ、先生之を知らず、身を障子の腰板に寄せ、種々に姿勢を變して、寐臥の形影を障子に反映せしめ、自ら眺め、自ら頷し、展轉反側すること其幾回なるを知らず。其翌先生筆を取て一室の杉戸に向ふ、而して其の現れ出る所皆な臥鶴の圖にして、絶妙絶技、筆下殆んど鬼神の寓するが如し。斯の如く先生夜に乃ち影を障子に寫して形体を案じ、晝は乃ち筆を取て杉戸に向ひ、十餘日にして二十五の臥鶴を畫き了れり。一夜主僧復た先生の室を窺ひ、其翌先生お謂て曰く、先生が今日畫かんと欲するは、應に斯の如き臥鶴ならんと、具に姿勢を擬して之を問ふ、先生大に驚き惘然として云ふ所なし、是に於て主僧乃ち告ぐるに夜來の事を以てす、先生畫かず、別に一椀を畫き東國に向ふて辭し去れり。先生往きく、て函嶺に至り偶ま一椀を見、心大に感ずる所あり、乃ち歩を反して一國寺に歸り、囊に畫きし椀樹に一枝を添ふ、畫致速に横生し、微風起り、綠翠滴れんと欲するの高趣あり。蓋先生の半筆零墨と雖、後人の之を尊重寶藏すると珠玉留ならざるは、豈に偶然

なりとせんや。復た彼のピストベノは實に音樂の大家なり、一夕月に乘して友と共に陋巷を歩す、一茅屋内に劇朝の音あるを聴き、歩を止めて之を聴取し、忽ち入て訪ふ。一少年一少女あり、共に粗笨の衣服を纏ひ、少年のテーブルに向ふて靴と造り、少女の頭髮五六徑垂れて頬邊に懸り、悵然としてピアノに倚れり、而して此女や實に盲なりき。己おして先生情懷禁じ難く、少女に代て、坐をピアノの前お占めしが、先生が指頭のキーに觸るゝや否や、切々嘈々、次第に彈し來りて次第に情多く、忽ち止まり、忽ち動き、忽ち浮び、忽ち沈み、其妙音譬ふるに者なく、少年の工事を止め、少女の兩手を以て胸臆を押へ、坐客好音に動かされ陶然として酔へるが如し、時に月光窓を射てピアノの上は落ち其幽逸言はん方なし。已にして曲畢るも先生心深く感するあるが如く、寂として一語なく、將に起て歸り去らんとす、諸人強て再ひせんことを請ふ、先生乃ち思ふ所あるが如く、長空を眺め、星斗を睨して復た一曲を試む。初めは幽寂として月光の下土を照らすが如く、後には

閃瞬として怪鬼の草間に舞ふか如く、人をして外國物を忘れ、自家を忘すれ、轉た身の人間にあるを覺へざりしむ。蓋し是れ世間希有の妙音にして、美術家の能事茲に至て極まれりと謂ふべきなり。仙女の霓裳羽衣の曲と舞ひて天に登り、師曠の白雪の音を奏して風雨暴に至れるが如き、不稽の傳説といへども其れ他あらんや。是れ皆な初めより瑣々たる手先きのみは依頼せずして、全心を擧げて此處に注入するを以て、精神注々として溢れ出で、美の觀念亦た從て汨々として溢れ來るが故なり。

今の所謂美術家たるや、競ふて手先きの纖巧を尙び而して意想を鍛練するなく、偶々意想を鍛練するものなるも淺薄にして見るに足るなく、或は巧に感情を現はすものなるも、其の現はす所は、只た一部分の感情のみにして、美づきの稱號をもらひたき人物は觀て以て感賞する所あらんと雖も、平心虚意に觀察せば、實は感ずるに足るなきなり。抑も美の具粹を發揚せんと欲せば、先づ美術家其人の生活をして

美術的たらしめざる可らず、若し美術家其人の生活にして美術的ならんには、其技藝少しく拙なる處ありと雖も、大に見るに足るものありと、猶ほ純金ならんには、形像甚た下劣なるも、頗る賞するに足るが如し。今や我が梨園社會に在て、團洲の技量優に絶倫絶佳と稱せられ、團洲にして一去せば、饒々たる幾多の俳優中、恐くは一人の起て後勁たるべきものなかるべし。蓋し在來の俳優たるや、品行不良、性質浮薄、學問識見等に至ては分厘も之れあるなく、柔弱軟弱、身振假聲等を弄して得々たる怪物共の墮落集合したる所にして、少しく事物を識別するの眼光を具有せるものならんには、誰か好んで此魔界に墮落せんや。已に然り、故に幕落ち、場開き、彼等の舞臺に立て舞ふや、飛揚活動、觀者をして肉動き、血躍り、殆んど席に堪へざる能はざらしむるなきに、職として是れ之お由らずんばあらず。若し夫れ忠臣藏を演ずるに於て、果して彼等の群中お一箇の寧馨兒ありて、大星由良之助の性質を感得し、人物を認覺し、依て以て由良之助に扮したらんには、就令其

身振と假聲とに至ては左程妙巧ならずとするも、必ずや大義漢として頗る觀者の心目を動かすに足るものあらん。然れども如何せん彼等卑々屈々、賤劣陋穢、英雄豪傑、佳人節婦、奇士哲人の性質志向等に至ては、毛髮も之を感得する能はずして、唯た徒らに市井の無賴漢或は姦婦等を粉裝躍出して觀者の心目を奪ふのみ。されば錦衣と疊の上の乞食かなの一向をして實境より出てたる實語あらしめ、或人をして團洲死後亦た團洲なかるべしと思ひしむるに、豈に必ずしも偶然なりとせんや。今や美術の語大に世間にもてはやされ、從て俳優をば疊の上の乞食より推し上げて美術家の一座に列せしめたるも、蓋し他の美術家輩に於ては、俳優と思はるゝを恥るのみならず、或は之と伍するを屑しとせざるものあらん。然りと雖も靜かに考ふれば、今の美術家たるや、之を俳優と相較するに、其品位、意想等假令劣るあるも、優るもの果して幾許かある。中には獨り俳優と伍するを屑となすのみならず、俳優と思はるゝを恥となさざるのみならず、得意揚

々好んで俳優を學ぶものあり、是れ洵に自家の品位、意想地位等を知るの明ある者と謂ふべきも、彼等畢生團洲の弟子に隨從して墓土に葬られんものにして、到底美術界の團洲たるを得ざる徒輩とす。要するに現今我國の美術たるや、徒らに外形の裝飾に馳せて、内外の情致協和一貫せず、乃ち美の根本たるべき觀念に至ては、作家も觀者も省みざるものと如し。鍍金豈に永く其の光彩を保つを得んや、世の作家たるもの大に自ら警戒する所なかるべからず。

社會の事物笑ふべきもの固より多し、而して慨すべきもの豈に又た尠少なりとせんや。今や黒奴の日本に來るを見るに、皆な洋帽を戴き、洋靴を穿ち、洋服を着く、且つ彼等の亞弗利加本土に在て歐人と交通するや、飲食、器具等萬般の品物悉く歐洲たらんことを願ひ、甚だしきに至ては身自ら歐人と化身せんと欲し、起居動作務めて歐人の身振りに模倣せり。若し又た日本人にして北米に航し、シアットル若くはヴァンクーバーに遊ばんか、必ずや洋装せる日本婦

人の三々五々、相携へて逍遙するを見ん、是に於てか懷郷の情禁し難く、就て故山の事を、語らんと欲し、懇懇に近て問ふあれば、婦人左右視して言語通せず、怪んで諦視すれば、宜なる哉是れ米國の遺民インジャンの婦人なり。若し又たマダカスカルに行て其官廳を訪ふあらんか、大吏より小吏に至るまで洋装洋飾にして、宛如として我國の官廳も異なる所なし。

抑も模倣は未開民人通有の性情にして、東西一揆、南北一轍、少しく珍奇の事物を見れば、直に之を模倣せんとすること、猶ほ小兒の大人の舉動を擬して欣々たるが如し。想ふに模倣の事たるや、感覺に依て内部に入りたるものをして、一に反應の作用に循ひて、以て外部に表現せしむるなり。されば小兒の如く能力未だ發達せざるものに在ては、模倣實に一種の效力ありて、智徳才藝の發達を助長するを頗る少からざれば、固より切に懲誦すへき所なりと雖も、已に長して二十餘歳に至り、尙ほ且致々として模倣之れ務むるものあ

らば、其人や侏儒の如く、俳優の如く、幫間の如く、到底卑陋賤劣を免るる能はず、洵ふ是れ巧言令色の怪物、獨立獨行の士人として言語道斷の至りなり。我れや國を開て歐米と交通せしより僅に三十年、所謂世界文明後進の國土なれば、所謂先進文明の國たる歐米の新事物を容るゝに急なるは勿論なりと雖も、而も靜かに二千年來の發達を稽查するに、風俗習慣、禮文藝術、他人と交際するに於て敢て甚だしく恥るふも及ばざるなり。大凡社會の事物たる、他を摸倣せんよりは、自家固有の特質を發達せしむるの優たることあり。蓋し我國固有の風俗たる、奚ぞ悉く沫殺すべきものならんや。抑も外事を取て之を用ぬんこと敢て排難すへきにあらずと雖も、其之をなさんには豫め守る所なかるべからず。即ち明らかに我れを主とし、彼を客とするの本領を確定し、彼れや只た取て以て我れの發達を裨補せしむるの用お供すへきのみ、始めより汲々乎として摸倣之れ務む、焉んぞ其可なるを知らん。蓋し北米聯邦に在て我が扇、傘等

の需要頗る多く、且つ漆器類頗る貴重せられ、又た歐洲各國に在て支那産出の茶、陶器等の珍重愛玩せらるゝの、夙に世人の熟知せる所ならん、蓋し彼等の之を用ゐるや、敢て摸倣するにわらず、只た取て以て我が足らざるを補ふに過ぎず。取て以て我が足らざるを補ふの、毫も非難すべきにあらずと雖も、頂より踵まで、左より右まで悉く他に摸倣して變換轉遷せんと欲するの、是れ自ら未開視するなり、野蠻視するなり、滄浪の水清まば以て纒を洗ひれ、濁らば以て足を洗ひる、人先つ自ら侮て而後他人之を侮る、嗟呼何ぞ思ひざる。若し夫れ我が日本にして、事物の何たるを問はず、一種異様の特色を現はし、以て外を裨補するを得ば、是れ實に宇内人類の爲に打ち消す可らざる功績を擧げしなり。若し又た我れにして務めて歐米の風俗習慣、文物典章等を輸入し、衣服飲食、灑掃應對等に至るまで、汲々乎として只た摸倣の巧ならざるを患ひ、全然國を擧げて歐化せんとせんか、蜻蜓洲の首尾、外人の日本を見るや、日本人の日本とし

六十四
て見るにわらずして、其見る所唯た山の勝と水の景のみならん、而して我が哀々たる民人に至ても、只た自國に於ける凡庸なる人物、賤劣なる奴婢と同一視せんのみ。然らば乃ち摸倣の極りや、只た國をして劣等なる歐米とならしめ、民をして劣等なる歐米人とならしめ、以て歐米國民中の賤劣なる種族を増加するに過ぎず。嗚呼是れ果して天地を育載せる造化の希望なるか。

濁

政弊

林辨次郎

世人往々當世を目して澆季と云ふ、何をか澆季と云ふ曰く人々徳を
離れ仁を去り、人々利に走り欲に趣くも風のなり、世人世の澆季に流
なるを益と知て、亦自ら其大勢に眩惑せられ、風潮の奴となり、世波の隸と
如く、益と知て、亦自ら其大勢に眩惑せられ、風潮の奴となり、世波の隸と
し、之れ澆季の方寸の策なく、行亦其言に反くも、の比々然らざるはな
試に夫の政治界を見よ、民間の志士有志家と唱ふるものを見よ、敗徳
彼等の罵詈雑言、假借する處なく、救恤亦彼等の腦を煩はさるもの
之を罵詈雑言、假借する處なく、救恤亦彼等の腦を煩はさるもの
一、利の存する處、嗚呼、喋りて見よ、其少く肉を争ふか、如く、利の存するもの
る處に、鬚を蓄へ、玄關を高く、其少く肉を争ふか、如く、利の存するもの
て、俄に、鬚を蓄へ、玄關を高く、其少く肉を争ふか、如く、利の存するもの
略、中を、求むべし、書を、嘲り、學を、蔑し、得て、揚言す、或は、妾嬖を、養ふ
相、互に、求むべし、書を、嘲り、學を、蔑し、得て、揚言す、或は、妾嬖を、養ふ
を、推し、自家の、長所を、吹聴し、他人の、短を、擧て、之を、非難し、恬んとして、
濁

耻るなく寧ろ得色あり、細民食に窮して恤を乞ふも敢て願みず、或は鬻間的の者
僮に金銭を與へて以て彼等の低頭平身するを喜ぶ、或は鬻間的の者
斯など威張顔するも、彼等が所謂鋤禾日當汗滿巾誰知盤中粒
事牛馬に異ならず、李紳が所謂鋤禾日當汗滿巾誰知盤中粒
々皆辛苦の如き、又無名氏が所謂鋤禾日當汗滿巾誰知盤中粒
不是養蠶人の如き、政治家として最も銘す自家あるものなり。然るに當今
の政治家あるを、知らざるを欺き、天下を瞞着し、私利に營々たるもの前に、
予輩單燈の下、夜色闇なる時、深く之を思へば、徐に暗涙袖を濡さず
人間は、あらざる也、嗚呼、彼等は、毒蛇の如く、彼等を以て眞の人なりとせば、
世人動も多し、アルは、體骸と含有とを誤解し、兩者の間相違あるを認めざ
るも、めたるが如きは、一例とす、政治者不可なかるへく、當今政治家の浮
薄不義不徳なるを見、直に政治者不可なかるへく、當今政治家の浮
治は形骸なり、政治家は含有なり、政治者不可なかるへく、當今政治家の浮
どて佛僧徒にして、不倫に至り、或は韓圖の哲學を誤解し、たりとて、佛
怡も格なるが如く、或は韓圖の哲學を誤解し、たりとて、佛
者は、不格なるが如く、或は韓圖の哲學を誤解し、たりとて、佛
梅林樹下、數多の俗物、蠟集して、孟盤狼籍紅裙參差し、絃歌並ひ起ると
梅林樹下、數多の俗物、蠟集して、孟盤狼籍紅裙參差し、絃歌並ひ起ると

すも、梅の清雅を抹殺し、能はざるか、如し。政治は國家の幸榮人
民の福祉を求むるの方便なり、一個の私利を謀り、一局部の威勢に
汲々たるもの、豈政治の本色なり、當今政治の形骸を了知せしめ、
は罪か之のなり、尙之を詳言せば、當今政治の形骸を了知せしめ、
の憂も、千里の馬の尾に、千里の馬を求め、其御蔭に行くと、かや、
諺に曰く、千里の馬の尾に、千里の馬を求め、其御蔭に行くと、かや、
の政治界に奔走する蠅輩、少く、小政事を求め、其御蔭に行くと、かや、
一行かんと、其意を、迎へ、温顔麗し、氣色悪く、漸く見れば、頭を
攀一笑を以て、喜憂を、な、少く、小政事を求め、其御蔭に行くと、かや、
を平あして、容れ、小政事を、な、少く、小政事を求め、其御蔭に行くと、かや、
も、の、至、は、小政事を、な、少く、小政事を求め、其御蔭に行くと、かや、
等の、心、を、買、に、足、り、鎖、を、た、る、黄、白、以、て、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
を、以、て、夫、野、人、等、を、鼓、舞、扇、動、せ、し、め、或、は、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
問、の、田、夫、論、を、し、以、て、公、論、な、り、或、は、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
て、施、政、の、方、針、を、當、局、者、を、攻、擊、罵、詈、し、或、は、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
云、ひ、觸、ら、し、政、府、の、當、局、者、を、攻、擊、罵、詈、し、或、は、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
と、す、謀、計、熟、し、政、府、の、當、局、者、を、攻、擊、罵、詈、し、或、は、疑、白、或、は、請、願、の、意、に、及、
夢、と、な、り、先、に、説、く、處、の、亦、水、泡、と、立、つ、や、此、亦、其、爲、を、先、に、約、す、る、代、所、は、
れ、則、り、一、も、更、む、る、も、の、なく、恬、と、し、て、亦、過、去、の、事、跡、を、願、み、さ、る、舊、制、の、
濁

如し、政治家の徳義腐敗茲に至ては亦極まれりと云ふべし。
 といつもの頃よりか壯士なるもの出て来り、政治家は必ず壯士を利用し
 て自家の威勢を伸張せんものとす、而して壯士の性質を尋れば大概は零
 落の若輩にして、所謂破落戸無頼漢のもの多く、死は易く生は難しど
 云ふ眞の道理を以て、所謂破落戸無頼漢の中に此世を送る輩にして、僅に牛麩
 に入て半酔を以て、放歌高吟傍ら人無きが如く、短褐弊衣高履を着け
 太杖を携へ意を以て、甲居るを常となせども、若し意に逢はずんハ忽ら去
 事家の鼻息を窺ひ居るを常となせども、若し意に逢はずんハ忽ら去
 て敵仇となるを知らず、警官に抗ひ、夕に乙氏に歸し、朝四暮三の術以て籠
 絡せらるるを横行し、少しく口辨あるものは政談演舌を試み、一場の悪
 喧々を并へて以て快となす、嗚呼何等の蒼蠅を政談演舌を試み、一場の悪
 口を至ても亦互に脅迫されんとを恐れ、警護に意を注ぐと周到なり、而
 家にして萬一の場合に臨ては止むを得ず、意を注ぐと周到なり、而
 若し辨して曰く止むを得ざるなりと、嗚呼彼等は意思の自由を知ら
 ざるか、自家の生命何者ぞ、區々たる生命に戀々として、而して其意思
 を賣る、實に淺ましき始末と云ひざるを得ざるなり。俗言ハ所謂養犬
 に手を噛まるゝとい之れ當世政治家の壯士に於けるが如き情態之
 れなり。
 若し政治家にして自から信ずる事篤かりせば、壯士の脅迫何を以て
 か彼等を動かさるに足らんや。天下に立て事を爲す者固より自信の篤
 からざる可からざるや勿論なりと雖も、就中政治家如きに至つては

自信の度最も篤からざるべからざるなり、輿論或は外界の勢により
 て自家の説を狂くるが如きは政治家の本心にあらざるなり、所謂天
 下舉て之を是とすも爲めに一毫を増さず、天下舉て非とするも爲
 めに一毫を損せずと云ふ氣象を持たざるべからず、英吉利大政治家
 フォックス氏が亞米利加戦争に反對したるが如く、コブデン、ブライト
 兩氏が穀物條例に反對したるが如き、凛然として犯すべからず、以て
 政治家の鑑となすへきなり、亦希臘の碩儒ソクラテスが其學說の爲
 に自若として鳩毒を傾けたるが如き、伊太利哲學者ジョルダノ、ブル
 ーノ、甘んじたるが如き、其自から信ずるの篤き景慕に堪へざる次第な
 らずや。ブルジョア最後其裁判官に云て曰く、景慕に堪へざる次第な
 其宣告を受取る私よりも御渡なざるあなたこそ多分の恐怖を抱
 かるゝならん
 ど、壯士の爲に、黄白の爲に、多數の爲に、情實の爲に、風向きの爲に、其説
 を二ふし、其自信を狂るが如き當今の政治家大に顧みざるへからざ
 るなり。
 歐洲中古宗教の腐敗するや、僧侶の位冠を賣り、罪科を賣り、爲に宗教
 の革命を起せり、今や我國政治界衣冠を賣り、權利を賣り、自家の意思
 を賣るに至る、政治界の腐敗誰か之を浩嘆せざらんや、マルチン、ル
 テル嘗てアリストートルは眞に悪魔なり、怖るべき訥人なり、紙痔者なり、闇
 アリストートルは眞に悪魔なり、怖るべき訥人なり、紙痔者なり、闇
 黒の君主なり、獸なり、人世の最大欺騙者なり、擺尾慨人なり、哲學の

目し相罵り相怨み相軌し相戦はしむる媒介は寸毫の益たも無きを
如何せん。卿等の小頭分争は風俗をして浮薄ならしむるを鑑みよ、彼
のメウイフトならしむるに狂奔をよりの幸福を増進するものなり
と忠告せらるる如し、嗚呼誰か之を濟ひ之を匡すものぞ、若しも滔々
態已に斯くの如し、嗚呼誰か之を濟ひ之を匡すものぞ、若しも滔々
哉累卵の光景、嗟是れ誰の愆ぞや。

學弊

都下笈を負ひて遊學するもの無慮數萬を以て算す、彼等の郷を出る
や男兒立志出郷關、學若莫成死不歸云々の詩を口にし、父兄親戚の前
に誓ひ揚々として途に就くもの比々然り、而して彼等の目する所を
問へば曰く官吏曰く卒業すれば月給何圓はお定り、以て車を抱ふるに足
り、玄關を高くするに足る、輕裘美食の常り前、花に戯れ、月に遊ひ、俗世
の快樂を恣にするは若かすなど、十人か九人迄は此種の胸勘
定を立つる故に、學問節操は尙愚か資金の計畫さへも六々なさずし
て無暗に官立學校を崇拜し、試験の定點に及ばざらん事を之れ憂ひ、
其極學問の爲に修行するに免狀を以て其身を飾り得るも、具に錦を以て
身に纏ふ能はざるなり。夫の衣冠を修め裝飾に汲々たるものは衣冠

裝飾の他誇るものなければなり、免狀を以て揚々たるもの果して如何
マックス、ユラ一日く

以前は試験を以て大學小學などの爲めとして之か必要を認めたり
りしが、現今に至るは學校の爲の試験に非ずして、試験の爲めに學

と、當今我國の學生社會の光景を穿てりと云べし。而して彼等は幸に
予輩實に同一の肉塊にして一夜の内に月監の相違、昨日の墨は今日の雪、

馳せ、交際場裡に出入し、先進者の髻を拂ひ、等一等を進むに閉口頓首
此れ喜び、好まざるの言を放ち、嬉はざるの笑を洩らし、陶然として俗

界の樂に耽るもの、是れ人爵を得たるとき、人に語て曰く予は自今眞の勉強を
學校を卒業し學位を得たるとき、人に語て曰く予は自今眞の勉強を

始めんと、當今のフリメンたるも、幾人かある。固より實務社會に
出ても、學文に身を委ぬるもの、汲々として常に書に對する能はずと雖

ても、著作などの字を蒙らしめ、同し文章を草するにも原稿料の爲めに
して學問の爲めに非ず、學者の節操亦腐れりと云ふべし、張憲武先生

共事林廣記に十可惜を述て曰く
古人分不能自給有帶經而鉏者有負薪拾黍而誦書者今人飽食煖衣
自暇自逸一可惜也古人不遠千里負笈求師今人有賢父兄救之而不
濁

從或閭里間有賢師友不知親近二可惜也古人手自鈔書夜以繼日常
 苦无書今人有見成印本藏之萬卷堆案盈几不知誦讀三可惜也古人
 三年通一經三十而五經立自少讀書今人當簡編可舒卷之時不讀日
 月逝矣四可憐也古人聚螢映雪可憐也人之生有不見日月者不聞
 雷者可親而遊談無限博變是娛五可惜也人之身則有丁趨向之不知
 生或不講殆將與盲聾者等耳六可惜也人之身則有丁趨向之不知
 賦或有人等七可惜也人之身則有丁趨向之不知
 爲工商今人生於儒家少嬰箕裘之上岸而有書不讀使父祖之業或
 墜八可惜也人之身則有丁趨向之不知
 悅紛華名曰士人其藏修無所不通一辭不諳有玷於先聖先師九可
 大節俱拂地矣陽雄曰人而不學雖無思如禽獸十可惜也
 實に當今の學弊を指摘して餘蘊なしと云へし講義録によりて試
 驗をすまじ、以て卒業生など切付けて耻つる色なきものありアラビ
 ヤの諺に曰く得業生など切付けて耻つる色なきものありアラビ
 失意は自由なるの人なり
 希望は奴隸なり
 當今希望を有するもの却て眞に自由なるの人なり
 望の位置に立つもの却て眞に自由なるの人なり

當今の大勢たる天爵を問はすして先づ人爵を問ふ、天爵は實に
 人爵は虚なり、前者は眞の價値おして後者は其看板なり、而して當
 世の多きは其看板に欺かれ易きを如何せん。其實ありて茲に看板
 を掲ぐるは常前の次第なれども、其實を問はずして單に看板を以て
 一人もなれぬ、人爵を有するも苦む事一割の立て易く、人爵のなきも
 人をもなれぬ、後肉を賣るも生計に苦む事一割の立て易く、人爵のなきも
 人を掲げて後肉を賣るも生計に苦む事一割の立て易く、人爵のなきも
 兎角、淺ましき動物に見て居る以上は色欲煩悩の爲に驕らるる、人間は
 故に、聖門眞如の月を見る能はず、只管俗界の満足を得んとする、若し
 遂お人爵にのみ目をつくるに眩せられ、虚あつて實あるの青年若し
 慮する所なく、徒に後波に眩せられ、虚あつて實あるの青年若し
 とする過さしめ、後波に眩せられ、虚あつて實あるの青年若し
 浮ふるも楚に入て千尋の風波をあくるかや、青年たるもの水上陽を
 すへき事共也。
 學生のみならず、教師たるもの亦非常なる弊に陥れり、深溪に陥る
 も、山の廻り、心を得、天地を見、能はず、只管學問技藝を賣て自
 して、心の廻り、心を得、天地を見、能はず、只管學問技藝を賣て自
 家糊口の種と心得、生徒に對するに、或は生徒のストライキ
 の如く、僅に約束の心得、生徒に對するに、或は生徒のストライキ
 調は粗忽にして、束の間の時、苟倫し、或は生徒のストライキ

を用ひて會彼等の鼻息を伺ひ、校長には勿論其他同寮の人に向て諂
 辭を應ひ、解雇せられん事を恐れて、或は折詰の聘物となり、或は酒宴
 の饗應となる生徒と教師との仲合せへも、殊に都下の學校の有様の
 如き教師にして生徒の顔付きを以ての外の名譽とし、無暗に東都へ
 地方の教員に於ては稍生徒と相知ると勝ち其圖に乗り、猫も杓子も東
 留學するを懇請するが故に、生徒も穴勝ち其圖に乗り、猫も杓子も東
 京々々といふに、我子には直に成るも道理なりと知りし、所謂「我横に歩み
 勝導已に誤りながら生徒の無鉄砲な親蟹に於て、先進者たる教師の
 り、後進の青年を以て直行せしめんとせば、先づ親蟹の横行を止めざ
 るべからざるなり。
 いづの頃よりか文部省にては各學校の卒業證書に人物及學業の品
 評を附せしむる事を訓令してより、何れの學校も皆之を附記したる
 が如し、之が爲に其進路上大に差支を生じたるも、少ならず、且又人々
 有するに非んば、決して爲し得べきものには、非常に達觀に富み、眼を
 より相異するは勿論、又時と場合とに由りて多少の相違あるは免れざ
 るの數なり、グラント將軍は青年の頃、不用者と云はれしに非ずや、誰
 かコウトンの少時を見て、アリンピヤを豫期せしか、語に曰はずや、誰
 る神童は壯年に至るに、地方の學校教師等か平易に之か品評を下して、恬

然たるが如き勇氣に至ては、予輩實に舌を卷かざるを得ざるなり。若
 し天下を欺くものなり、諂諛を以て強て之か評價を下すに、此れ即ち
 天下を欺くものなり、諂諛を以て強て之か評價を下すに、此れ即ち
 果さよ、或は優等の人物にして、品評するに、其の附せられたる學生の因
 少なるを問はざるなり、通常他人をして劣等の評價を請取りたるは、其迷感
 には、道徳を以て、教養の土臺とする方針に、之を正銘に切附て渡すが如き
 は、道徳を以て、教養の土臺とする方針に、之を正銘に切附て渡すが如き
 も、ざるを得ず、而して、驚くべく、嘆息するや、而して、文部省は之に任
 豈に人物を講別するの明らんと、而して、文部省は之に任
 亦之を行ひたり、群盲象の評するや、而して、文部省は之に任
 當今の教育は、初等にして、樹の内に、養ふが如し、殊に官立學校の弊茲に
 存するを見る、初等にして、樹の内に、養ふが如し、殊に官立學校の弊茲に
 し、同一の教育に、至るも、自由なるが如し、殊に官立學校の弊茲に
 り、同一の教育に、至るも、自由なるが如し、殊に官立學校の弊茲に
 録に、今日、方針たる、彼等をして、可成的同一に、歸せしめんと、然
 るに、當今、方針たる、彼等をして、可成的同一に、歸せしめんと、然
 も、能く、自由、各、其、割、を、引、け、を、取、ら、ず、長、者、も、其、割、に、技、を、展、
 何に、能く、自由、各、其、割、を、引、け、を、取、ら、ず、長、者、も、其、割、に、技、を、展、
 濁

カライルの一能に達するものは萬能に通ずと云ふが如きは例外
 の往文と知るへし、故に普通教育を修むる間は平凡の才能を現はすもの
 る様に見ゆるも、専門の學科に踏出し、天稟の長所を發達せしめんと
 多し、予の友人など、斯るもの澤山あり、天稟の長所を發達せしめんと
 せは、可成自由になんか、反し、私立學校は其制度甚だ疎に過ぎ、自由
 官立學校の樹形的なるに反し、私立學校は其制度甚だ疎に過ぎ、自由
 に過ぎ、シマリなく、生徒をして放逸お流し、就中私立學校の最も弊害
 立學校は重箱の如く、私立學校は袋の如し、議員撰舉など、學校の最も弊害
 時に富むは法律政治の學校なり、或は國會議員撰舉など、學校の最も弊害
 却し有頂天になり、恰も壯士の政治的の舉動をなす、彼等は自分
 輕んみ、自ら辱しむるも、導て不測の深淵に至らしむるもの多し、自ら
 きのみ、一步又一步、國家を導て不測の深淵に至らしむるもの多し、自ら
 當世政治の變りたるを、稽古する、輕薄學生なり、慎まざる可んや。
 一、種毛色の學校之れなり、殊に女子學校多し、其一般の補助に由りて立つ
 耶蘇教的學校之れなり、殊に女子學校多し、其一般の補助に由りて立つ
 基、亞米利加の學校之れなり、殊に女子學校多し、其一般の補助に由りて立つ
 就中、亞米利加の學校之れなり、殊に女子學校多し、其一般の補助に由りて立つ
 國、亞米利加の學校之れなり、殊に女子學校多し、其一般の補助に由りて立つ
 蘇信者には、尙別らぬ人多きと見へ、何ても無暗に似たり、雖も處に
 蘇信者には、尙別らぬ人多きと見へ、何ても無暗に似たり、雖も處に

多きには、困却するなり、殊に女學校の生徒の如きは最も此弊多く、西
 洋のシエーンと云て持ては極樂へでも行くと横文字にて書き、亞米利加
 へ行くなど、身悪きにあらば、之を信するも氣にならぬ、多し、此等は耶蘇
 教、其れ自ら匠の真似をたがはる、幼年の常なれは、西洋人の教育
 を受る、凡て師匠の真似をたがはる、幼年の常なれは、西洋人の教育
 も、獨逸人の講義を聞くもの、獨逸風を慕ふもの、去りて之を恕
 婦女子など、は感情の動物なれば、獨逸風の事と思はる、去りて之を恕
 すべきにあらば、西洋人も、西洋の學問も、風俗も、宗教も、取りて之を恕
 取るべきにあらば、西洋人も、西洋の學問も、風俗も、宗教も、取りて之を恕
 口、信仰すべし、大患を起すなり、耶蘇教の學校にあらぬ、次第なれども、
 び、且信仰すべし、大患を起すなり、耶蘇教の學校にあらぬ、次第なれども、
 之を要するに當今、教育社會の一般は、人の精神を養ふ事を忘れ、外觀
 末、其の精神を鍛練し、而して、技藝を授けたり、昔は諸大家皆門生を養て先
 つ、其の精神を鍛練し、而して、技藝を授けたり、昔は諸大家皆門生を養て先
 ヤク、如き動物漸く増加せんと、實に慨嘆に堪へざるなり、之れ亦世の
 澆季なる所以なるか、嗟、教育界に在るもの猛省せよ。

近來社會の出來事多きに従ひ、社會の問題も相應に夥しく出てぬ、就
 中、條約改正、政費節減等の問題は、志士の問題の最も舌を爛らし筆を秃する
 處なり、是等の問題は、隨分重大なる問題にして、若しも當局者に於て

入道の如く見れば其長延して際限なし、入道の輩出する所即
 百鬼夜行の現象を呈せんか。嗚呼富勝貧敗は社會の定數あるか、已む
 へさか、將た己むへからざるか。蓋し疑問なり。に、德義上の事柄退歩す
 右の如く、經濟上實力の懸隔甚しきに加ふるに、德義上の事柄退歩す
 追々増長し、隨て德義の掃地は専ら科學を基とするか故に、奢侈の風
 會の事柄複雑に趣く程衣食の競争も甚しく、他人を顧る暇なきは社
 道理なれども、衣食充分の競争も甚しく、他人を顧る暇なきは社
 天地を採り、饑寒窟に旅行し舌を爛らし筆を秃して是等の慘狀を訴
 る人あも、爲に涙一滴さへ目に浮ぬ人比々然り、同じ喜捨義捐を
 するに、新聞へ廣告せねば引付けぬ、品物を惠與するにも可成衆人
 の目前に於て、か如き人氣となりぬ、道德の磨滅するに可成衆人
 き次第ならずや。大富益權勢を占め、加ふるに德義滅却するに
 斯の如く、貧人は大富を怨むに至るは自然の勢に於て、社會主義共産主義
 從ひ、貧人は大富を怨むに至るは自然の勢に於て、社會主義共産主義
 など此に基するも、國あり、互に生存の爲に火の産あり、一家族世襲財產
 の存する所、茲に一家族の存する所、茲に世襲の産あり、一家族世襲財產
 競争する以上は、体力の強大なるも、智力の優りたるも、血眼をして
 一競争に打勝つは之れ、是に至るも、か貧富強弱大小の差異を生し、亦
 一度差異を生したる以上は、多々益々懸隔を生し、遂に底止する所を

知らず。故に苟も人間をして共に平等なる幸福を稟んとせば、須く私
 有財產を撤去せざるへからず、之を説くも、或は著書に於て之を唱
 へしを始とし、羅馬の所有地制限法、經費制限法の如き富勝貧敗を防
 くの法に於て、下てサトマス、ムーアのユートピアの如き富勝貧敗を防
 のカムパチラ、佛蘭西のマブリー、モレリのユートピアの如き富勝貧敗を防
 ン、シモニズム、カール、マルクス、エンゲルスの名士バクニアも亦之を唱へ、獨逸
 にはラッサル、カール、マルクス、エンゲルスの名士バクニアも亦之を唱へ、獨逸
 加はは、遂に現今勢力を逞ふする萬國労働者組合となれり。其筆發し
 て或は進歩及貧困の著し勃興して大に此弊を救はんとし、進んで濠州
 航して大に其主義を唱ふるに至れり、近來日本にては、或は濟世危言と云ひ、
 或は社會黨鎖閉と云ひ、皆社會主義より來るものなり、或は濟世危言と云ひ、
 或は社會黨鎖閉と云ひ、皆社會主義より來るものなり、或は濟世危言と云ひ、
 部と云ひ、或は労働組合と云ひ、社會黨の卵子には、或は濟世危言と云ひ、
 社會主義果して好結果を呈すへきや否や、然れども、社會組織の資質已に
 天稟の差別あり、而して其差別ある動物を以て、社會組織の資質已に
 は、社會上の差別あり、而して其差別ある動物を以て、社會組織の資質已に
 せんとす、か如きは必竟無理なる注文なり、然るに強て之を均一
 要するに、其中位を取り、調和を鹽梅能く加減するを得ば、可なりと雖

のも、其調和こそ至難の問題に、若しも適當に解釋されなは人世
 講し、社會の道徳を高くする事を務め、個人を以てして、特獨の利益を
 へ、對し、政府は、日本は、必竟、甚だ、肝要なる條件と思はる。利益を
 之を要する、此二者は、日本、現今、有様を以て、資本主義の弊日増に
 高め、つゝ、ある、或は、職工の罷工、同盟など、或は、資本主義の弊日増に
 合宜し、からず、或は、職工の罷工、同盟など、或は、資本主義の弊日増に
 たり、日本、光景、未だ、左程の軋も、なく、貧富の差も、沙汰毎々、接
 其度、未だ、高からざる、内、其、豫防の策も、講ずる、國家の爲
 め、重大な、事なるべし、資本主義の弊日増に、國家の爲
 さん、宗、今、政治、之を、戒め、す、ん、は、將、來、果、して、社會の調和を
 道徳、宗教、政治家、經濟家、宜しく、意を、留め、よ、巨萬の富を蓄へ、陶然

人の情感を支配する勢力の最も大なるものは、宗教之れなり、男女の
 愛も、感情の強きものにして、賤女の一髮、尙能く、大衆を驚く、事に足ると
 の、諺も、蓋し、此が、謂なる、へ、し、と、雖、とも、是、れ、一、個人に、屬する、事、に、足ると
 強は、即、強なり、と、雖、も、未、た、以、て、大、と、な、す、へ、か、ら、さ、る、也、權、八、小、紫、の、愛
 如何に、濃なり、前者は、單獨、あ、り、て、後、者、は、普、遍、な、り、小、三、の、爲、に、は、其、家、産、を
 さる、なり、前者は、單獨、あ、り、て、後、者、は、普、遍、な、り、小、三、の、爲、に、は、其、家、産、を

蕩盡して、未だ、覺めざる、の、金、五、郎、あ、る、へ、い、と、い、へ、と、も、其、及、は、す、所、の
 影響、治郎、に、過、さ、ず、宗、教、に、至、て、は、即、然、ら、す、善、男、善、女、の、膏、血、を、絞、る、に
 足り、億兆の、生靈を、犠牲に、供する、事あり、十字軍は、巨萬の、信者を、し、て、
 怒髪冠を、衝き、目眦、裂けて、巨萬の、異信者を、焚殺し、放逐し、退去せし、味
 イ、ン、ン、非、す、や、宗、教、の、勢、力、影、響、の、強、且、大、なる、凡、そ、斯、の、如、し、宗、教、家、た、め
 たる、に、非、す、や、宗、教、の、勢、力、影、響、の、強、且、大、なる、凡、そ、斯、の、如、し、宗、教、家、た、め
 佛も、渡來し、て、留め、さる、へ、け、ん、や、の、強、且、大、なる、凡、そ、斯、の、如、し、宗、教、家、た、め
 雖、も、遂、に、日本、固有の、神道、を、壓し、宛、然、獨、歩、の、姿、を、呈、し、佛、教、の、外、日
 本、國、理、亦、一、の、宗、教、な、さ、が、如、き、感、ある、に、至、れ、り、德、川、氏、の、末、葉、に、至、て
 耶蘇、教、始、め、て、傳、來、し、佛、教、の、勁、敵、と、こ、そ、知、ら、れ、た、り、近、來、又、耶蘇、教、の
 一派、なる、惟、一、神、教、及、ひ、宇、宙、神、教、な、ど、傳、來、し、宗、教、社、會、漸、く、多、事、な、ら
 んと、す。
 多年、獨占の、形あり、し、佛、教、耶蘇、教、の、襲、來、に、驚、て、目、を、醒、まし、耶蘇、教、の
 傳道、に、熱心、なる、に、つ、れ、て、佛、教、も、亦、傳、道、布、教、の、事、に、骨、を、折、り、初、め、或
 は、演說、會、或、は、説、教、或、は、研、究、會、或、は、雜、誌、發、刊、等、總、て、の、方、便、を、以、て、佛
 教、振興、の、策、を、講、ず、る、事、と、な、れ、り、然、れ、ど、因、襲、の、久、し、き、が、爲、め、佛、教
 社會、の、弊、風、を、頓、に、改、む、る、能、は、ず、僅、か、の、僧、侶、は、經、文、の、事、より、宗、教、の、何
 たる、に、至、る、ま、を、辨、得、る、居、る、と、雖、も、地、方、邊、陲、の、寺、院、に、至、て、は、多、く、は、宗
 教、の、何、に、切、付、け、る、を、辨、得、る、居、る、と、雖、も、地、方、邊、陲、の、寺、院、に、至、て、は、多、く、は、宗
 太、に、何、を、辨、得、る、居、る、と、雖、も、地、方、邊、陲、の、寺、院、に、至、て、は、多、く、は、宗
 酒、切、付、け、る、を、辨、得、る、居、る、と、雖、も、地、方、邊、陲、の、寺、院、に、至、て、は、多、く、は、宗

獨

り、或は内職に托鉢する事をは辯するも道德の講釋は出來ざるものあり、或は下は凶事あるを幸とし金儲の種と心得る。浮屠氏あり、實に宗教の本旨に非禮の器械を以てし、道を傳へ徳を布き、社會の内部を治め外部を相提携して其進歩達を謀るへきものなれば、茲に汚水にたも思ふ。の刀如し、水流るゝ時は常に清なるも、沈涯すれば或は鏽なしとせず、正宗の難きの弊にしまも、佛の本來の次第の内を忘れ、輕重の度を失する事は免れず、の刺撃を蒙り着々歩武を進めて佛敎社會の改良を謀らんとするは予輩雙手を蒙りて、佛敎の弊を改むるは亦徐々たり、凡て之に成りたるは破れ易く、遲々として來るものは亦徐々たり、以て之に成りたるは前にもあり、之が改むるは一朝一夕に來りたるは亦徐々たり、以て之に成りたるは中にもあり、俄に大陽の明に逢ふも、折るは目眩して見る能はざるは、佛敎社會の改良如く、舊弊を留めざるへからざる也。折るは目眩して見る能はざるは、佛敎社會の改良右の如く、舊弊を留めざるへからざる也。折るは目眩して見る能はざるは、佛敎社會の改良大弊の如く、舊弊を留めざるへからざる也。折るは目眩して見る能はざるは、佛敎社會の改良相と係するの現象之れなり、政治と宗教とは多くの學者の許す所に別物にして、其弊害たる

歐洲中古の歴史を繕かば、即座に了解すへきなり。或は議員被擧權を得んとし、或は遠俗して其權下を手にし、以て政治上に運動を試んとして、彼等の俗僧あり、彼の被擧權の如きは我帝國憲法の定むる處にせずや、彼等の強て之を得んとするは政治上に奔走し、浮世の虚名を博さん、輕んずるが如きは、宗教社會の最も忌み、輕んずる處にあり、若し左程に宗教を輕視せは、道德の維持も佛敎の維持も覺なきや、若しを觀念し得るの明果も、彼の等に望む能はざるか、彼等は何を悟らざる、彼の乗あり、法を傳ふるの法師は難行道より成佛の域に達し、以て中根以下、僧侶大乗を導き、小乗を説く易行道より成佛の域に達し、以て中當今の僧侶大乗を導き、小乗を説く易行道より成佛の域に達し、以て中々、おし政權を争ふか、如きは未だ以て大乘ある、俗社界と并馳し、人爵に懸門、おし政權を争ふか、如きは未だ以て大乘ある、俗社界と并馳し、人爵に懸に依らず、大乘に覺束なきあり、小乗の人は然らば、彼等の成佛は到底小乗を語らざる、大乘に覺束なきあり、小乗の人は然らば、彼等の成佛は到底小乗再ひ、然らざる、大乘に覺束なきあり、小乗の人は然らば、彼等の成佛は到底小乗耶蘇敎も渡來後、日尙淺しと雖も、仲々の信者あり、其信者多くは青濁

年如多し、天下唯一の宗教の如く、實際の如く、觸れまわすもたかしの然れども、佛敎の體裁巧なり。前にも述べ、如く、蘇信者、甚しき外、國崇拜、内國、卑下の如き、に陥り易きは、沙汰と云はざるを得ざるなり。或は、天帝の外、敬すへき、も、以て、信すへき、道徳、社會、の、平等、を、以て、基、ふ、る、なり、或は、實、に、ケ、カ、ラ、マ、云、ひ、草、と、云、へ、し、道、徳、社、會、の、平、等、を、以て、基、ふ、る、なり、或は、實、に、ケ、カ、ラ、マ、云、將、も、乞、食、も、馬、丁、も、差、別、な、き、に、は、相、違、な、く、一、視、同、仁、に、在、て、は、王、侯、も、相、り、ど、は、云、へ、其、の、筆、法、を、以て、信、者、同、士、を、い、相、敬、愛、し、相、扶、助、す、と、雖、も、然、る、に、交、際、場、裡、に、あ、り、て、は、信、者、同、士、を、い、相、敬、愛、し、相、扶、助、す、と、雖、も、然、未、信、者、若、く、ハ、非、信、者、を、い、一、概、に、別、種、の、人、を、以て、之、れ、を、目、し、何、と、な、く、之、を、輕、ん、じ、之、を、省、く、の、風、あり、實、に、彼、等、の、度、量、の、狭、隘、な、る、に、驚、く、之、を、聞、く、耶、蘇、敎、徒、の、愛、を、以て、教、を、立、つ、る、の、な、り、と、若、し、前、の、如、き、愛、に、し、て、耶、蘇、敎、徒、の、洋、行、す、る、人、を、問、へ、十、中、八、九、は、亞、米、利、加、へ、行、く、の、あ、り、何、故、に、彼、等、の、左、程、に、米、國、を、執、心、な、る、か、怪、む、に、堪、へ、た、る、次、第、も、風、を、見、倣、ひ、米、國、の、例、の、女、尊、男、卑、及、拜、金、的、の、國、柄、故、に、談、話、會、の、連、中、を、喜、み、居、る、め、或、は、聖、朝、の、後、は、頻、に、女、權、な、ど、を、唱、へ、て、女、子、談、話、會、の、根、情、に、富、み、居、る、な、り、(耶、蘇、信、者、に、り、類、ら、ず、馬、鹿、物、の、洋、行、に、凡、そ、如、斯、の、根、情、に、し、) 江、南、の、橘、も、江、北、の、信、者、に、限、ら、ず、馬、鹿、物、の、洋、行、に、凡、そ、如、斯、の、根、情、に、婦、人、共、か、社、會、の、外、面、お、運、動、す、る、を、見、て、は、直、接、真、似、を、し、た、が、り

或は矯風會、或は禁酒會、或は何、或は何、家政の始未などより、寧ろ社交を忘れて霧中に奔走するが如きは、至當なる行為に非ざるなり。或は、政治には、請願、或は、意見、を、表、し、外、觀、を、装、ひ、條、約、改、正、に、は、建、白、書、を、出、し、國、會、に、は、談、話、の、嚆、柄、に、意、見、を、呈、し、良、人、の、御、手、傳、な、ど、し、て、走、廻、る、を、榮、譽、と、し、氣、取、り、込、み、て、恬、然、に、國、家、ど、か、グ、ラ、ッ、ド、ス、ト、ン、と、か、ヒ、ス、マ、ル、と、か、婦、人、の、修、む、へ、き、道、あり、治、す、へ、き、分、あり、語、に、曰、く、婦、人、は、發、達、し、た、る、男、子、に、あ、ら、ず、全、く、異、り、た、る、も、の、外、而、的、奔、走、は、少、し、穩、便、に、致、し、て、男、は、剛、に、し、て、子、の、揃、ふ、も、の、な、り、婦、人、の、外、而、的、奔、走、は、少、し、穩、便、に、致、し、度、も、同、一、の、問、題、に、し、て、佛、敎、の、取、る、所、に、は、耶、蘇、敎、一、概、に、之、に、反、對、す、る、が、如、く、一、種、の、感、情、よ、り、し、て、甲、條、約、改、正、に、賛、成、す、る、は、乙、信、徒、は、存、娼、を、唱、ふ、る、か、如、き、事、あり、例、へ、は、甲、信、者、廢、娼、を、唱、ふ、る、に、は、耶、蘇、敎、一、概、に、之、に、反、對、す、る、が、如、く、一、種、の、感、情、よ、り、し、て、甲、條、約、改、正、に、賛、成、す、る、は、乙、信、徒、は、存、娼、を、唱、ふ、る、裂、き、事、な、り、尤、の、次、第、な、れ、ど、も、宗、旨、の、異、な、れ、は、ど、し、大、なる、は、小、頭、分、な、し、再、争、ひ、ケ、ル、如、き、觀、望、は、數、萬、の、人、を、焚、殺、せ、し、め、異、宗、の、信、者、を、放、逐、し、し、慘、澹、たる、光、景、を、呈、せ、し、む、る、に、至、ら、ん、か、

獨

惟一神敎宗宙神敎は獨斷的の耶蘇敎を脱化し來りて稍進歩の風あり

り、獨逸派の神學も此傾向を有し、日進の科學哲學に基き其教理を立
てんとす、然れども未だ淺薄にして、佛敎の科學哲學に基き其教理を立
之なり、日新の開化に伴はず、宗ありと占むべきは佛敎及耶蘇も立
社、會に對して何等の効力も振はらず、平田本居の如き大人も見る能は
ず、角行、尊師、食行、甚た萎微し、實行、躬踐の偉人も現出せず、其振起る能は
や、無理もなし、且其師の如き、淺薄に如きは、前にも述し、如く、日新の益其勢を力
を失ふは、當なり、佛耶兩敎の如きは、相待て進歩するを以て、其進歩を
酌み、消長して、他の諸小宗は、其光を失ひ、其相待て進歩するを以て、其進歩を
敬と云ふべし、若し、諸小宗は、其光を失ひ、其相待て進歩するを以て、其進歩を
達觀し、人倫の道、辨へ、以て、輝く、此又、神儒佛のありし、頃者、神道、儒敎、佛敎
の三者を、拆衷せ、東洋哲學、大道、協會なるも、今や、其研究に力甚た美なり、佛敎
云ふ、會叢書を、發行し、近來、丸山講堂、此又、神儒佛のありし、頃者、神道、儒敎、佛敎
哲學會、書を、發行し、近來、丸山講堂、此又、神儒佛のありし、頃者、神道、儒敎、佛敎
む、や、多し、下流、社會、向て、奇、怪、なるも、今や、其研究に力甚た美なり、佛敎
の、多し、下流、社會、向て、奇、怪、なるも、今や、其研究に力甚た美なり、佛敎
深き敎理、あるに、あられ、され、一、時、の、際、信、に、過、き、か、る、に、は、之、無、し、故、に、信、者、而

隨ひ、信者も、無くなるは、當前の、次第なれども、下流の人をして、悉く、難
信の、不平均より、貧人、愈増加するの、傾向あるも、以上は、尙、以て、一層の、難
事と云ふ、驚く、へ、く、嘆、す、へ、き、其、他、諸、種、の、謬、信、大、に、下、流、に、勢、力、を、占、め、居、る
い、實、に、驚、く、へ、く、嘆、す、へ、き、其、他、諸、種、の、謬、信、大、に、下、流、に、勢、力、を、占、め、居、る
亦、以、て、人、心、の、傾、向、を、知、る、輩、存、外、に、多、く、淺、草、觀、音、の、御、利益、繁、昌、す、る、は
居、る、能、は、ず、經、濟、上、に、は、常、に、劣、敗、の、位、置、に、立、ち、一、方、に、は、謬、信、に、陷、る、は
其、餘、波、の、及、ぼ、す、處、決、し、て、少、々、に、あ、ら、さ、る、な、り、或、は、社、會、黨、と、な、り、或
は、宗、敎、一、揆、と、な、り、一、時、の、擾、亂、と、愚、起、す、る、や、必、せ、り、大、宗、敎、に、從、ふ、も、或
の、能、く、謬、信、者、を、導、か、さ、る、べ、か、ら、ず、政、治、經、世、の、局、あ、當、る、も、又、此、等
を、愛、護、せ、さ、る、へ、か、ら、さ、る、な、り、然、ら、ず、ん、は、後、世、果、し、て、修、羅、場、を、見
ん。

人心腐敗し、道徳萎微するに、方てや、虚禮虚式を、貴ふの風起り、深き眞
心、紅なる赤心は、之、共、に、減、却、す、る、も、の、な、り、政、治、家、教、育、家、宗、敎、家、皆
其、弊、に、陷、り、た、る、の、次、第、は、已、に、前、に、述、へ、た、る、か、如、し、社、交、上、に、於、て、も
亦、其、弊、甚、し、き、を、見、る、。第、は、已、に、前、に、述、へ、た、る、か、如、し、社、交、上、に、於、て、も
試、に、彼、の、葬、儀、を、見、よ、燦、爛、た、る、花、臺、を、以、て、葬、儀、の、見、へ、を、能、く、し、或、は
其、數、を、以、て、褒、貶、を、試、み、或、は、見、送、人、の、車、馬、幾、百、輛、以、て、名、譽、と、な、す、固
よ、興、望、を、負、ひ、勳、功、の、ある、人、に、あ、ら、す、ん、ば、幾、多、の、送、葬、人、は、期、す、へ

思ひたる男女、俄に男女混合的の耶蘇教を見て都合善き宗旨なりと
を以て無理往生に結せしむるも、又單に當人に耳一任し自由の意のみ
婚せしむるも、兩極端の弊害と云ふへし、若きもは意思未だ定まら
ざるの折衷酌せざるへからず、壓制結婚と自由結婚との弊大略斯
の如し、兩者の中庸を取り、決して輕舉結婚と自由結婚との弊大略斯
右の弊害なり、政略結婚の内に富を目前に來れり、何そや、曰く政
結に男共は殊に此傾向あり、當世の青年輩就中政治など、權勢を目
て若し、太宰翁も其經濟録中婚姻論に第一徳第二年齡第三兩家の門
に若し、太宰翁も其經濟録中婚姻論に第一徳第二年齡第三兩家の門
格、禄位、相當を以て結婚の要素なりと論せられたり、されば相互の
あり、之れ其政略に出るを以て富を目的にせず、若し、若し、若し、
は其愛を唐にあらざり、波瀾を起し、不和となり、故に若し、若し、
必其妻を甚しきも、波瀾を起し、不和となり、故に若し、若し、若し、
及ふも、甚しきも、波瀾を起し、不和となり、故に若し、若し、若し、
事家の婿とあり、不仁の無禮無徳之れに過るは、前如く、或は小才
財を威を逞むるも、狐の學ふあり、或は奔走し、借金山の如く、何千
財を威を逞むるも、狐の學ふあり、或は奔走し、借金山の如く、何千

は、婦の腰にて洋行などして、楊々たる者あり、破廉耻之より大なるは
なし。文中子が曰く、婚姻論、財夷虜之道也、蓋し至言と云へし。愛なく
り、政略の爲に、黃白の爲に、輕んずるの風あり、富家の女子、如何なる
より、出る妻は、其夫を輕んずるの風あり、富家の女子、如何なる
之に、詔ひ、之に媚るの狀態あり、此の如く、富家の女子、如何なる
福得て、否や、口惜し、く、淺ましき事なり、何れも、閨門和せず、團
一見、父の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
止むを得ざるの觀あるなり、社會の下層に於て、之れ、政略結婚の結
なむ、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
き、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
間、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
む、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
ら、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
不幸之より、大なるは、破廉耻之より大なるは、破廉耻之より大なるは
至る、の爲に、眩惑せられ、隨分、不相應なる結婚を、田夫に至る
人を訪問するに、手土産として、維持する能はざるに、至らん。噫。
例とす、蓋し、此事たる已に、字を見ても、明にして、其始め、土産の珍
或は、遠方を贈答せし、物より、始まり、別段の珍らしき者あり、其珍
樂を分たんと、來物と、是れ、人情に、段の珍らしき者あり、其珍

云ふへし、然るに此習慣流れて虚禮に陥り、當今の有様とはなりしな
 り。此事に於ては、一飯を進むるも、志深く多味あり、主たる道論は、
 早瀬の鮎水底の鯉とて、葉がきのへからず、籬の露山路の葛かつら
 と、明暮て求ぬ人をまつ、矢張同様に、志薄く、只儀式の爲に餘儀なく
 持參する様では、鶯の舌鯛の頬肉とて、味あるへからず、社交上最も
 重んずるべきは、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、社交上
 殊に手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、社交上
 家の爲にせんと、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 て所なり、然るも、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 しき近き如く、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 前にも述べし如く、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 賂に近き如く、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 の久しき如く、手土産など、其志にあり、又商法家など、味あるへからず、
 るに堪へざるなり。
 望に堪へざるなり。
 近來懇信會とか親睦會なるもの頻りに行はれ、春秋二季の如き最も
 盛に行はれ、料屋の繁忙を見る、之れ至極立派なる事に、社交上
 親睦を厚ふ、料理屋の繁忙を見る、之れ至極立派なる事に、社交上
 最上の機關なり、之れ至極立派なる事に、社交上

少して形式的に流るるを見る、或る會に於ては、名判の取遣りを盛に
 受取りたる名札袖に充つるも、其後の交際を遅ふせざるも、比々
 然り、是等は誠に一時の快買ふに過ぎず、其利益甚た少く、寧ろ
 有害なり、寧ろ止むる方然るへきと思ひ、若しは親睦の義に爲さん
 せば、眞意を以て、眞に親睦の旨に協はん事、希望に堪へざる
 なり、當今有様にて、未だ極端なる弊に至らずと雖、久しきを
 經つば、必ずしも非常なる弊を伴ふや明なり。
 いづの頃よりか、新聞の廣告なるもの流行し、年始年末の禮より、死
 轉居に至るまで、必すし、新聞の廣告なるもの流行し、年始年末の禮より、死
 の如き、拜賀の禮を煩はし、新聞の廣告なるもの流行し、年始年末の禮より、死
 加不、山坂の雪路を越へ、遠近の問はず、廣告も、此頃頻りに多き、實に雲
 泥の相違、云ふへき、役のみに、又死亡の問はず、廣告も、此頃頻りに多き、實に雲
 し、雖も、此又、何の故に、立たす、宜し、廣告も、此頃頻りに多き、實に雲
 間の廣告、知り、親戚の故、舊へ、別、通、告、を、な、さ、る、風、習、な、り、假、令、新、聞
 も、あ、れ、何、の、事、を、告、ぐ、る、に、過、さ、す、商、業、上、な、ど、の、必、要、は、見、出、し、能、は、さ、る、
 か、態、々、内、の、凶、事、を、告、ぐ、る、に、過、さ、す、商、業、上、な、ど、の、必、要、は、見、出、し、能、は、さ、る、
 な、り、家、内、の、凶、事、を、告、ぐ、る、に、過、さ、す、商、業、上、な、ど、の、必、要、は、見、出、し、能、は、さ、る、
 告、せ、ぬ、廣、告、な、ど、の、悲、し、む、の、な、り、何、の、故、に、他、の、婚、姻、出、生、な、ど、の、役、に、も、
 立、た、ぬ、廣、告、な、ど、の、悲、し、む、の、な、り、何、の、故、に、他、の、婚、姻、出、生、な、ど、の、役、に、も、
 立、た、ぬ、廣、告、な、ど、の、悲、し、む、の、な、り、何、の、故、に、他、の、婚、姻、出、生、な、ど、の、役、に、も、

鼓舞して浮薄に流れ、上るの恐あるを以てなり、其他種々意味の無
き廣告など頻に新聞紙上に現はるは、以て風俗の輕薄なるを證す
るに足るべく、實に嘆はしき次第なり、事少なるに似たりと雖も、其
結果影響する處實に容易ならざるなり。
之を要するに社會の改良を謀らんとせば、理屈を習ひ専ら高尙に馳
する事耳に限らず、社交上に墜る弊風を除去せる事など最も力を盡
さいる可らざる也。

結論

上來論述せし處を概括すれば、大智益智にして大愚益々充滿し、大富
經濟社會に跋扈して、貧人僅に其日を繋ぎ、天地の道理を觀達
そるの明あるも、志薄く、政治家民を思はず、教育家を愛せず、社
交は虚禮虚式に走着、疑はしむ。人の世に處する何人も幸福
會の大勢何くも言を待たず、疑はしむ。人の世に處する何人も幸福
を希望するや、言を待たず、疑はしむ。人の世に處する何人も幸福
且有まじき事と思はる、唯比較的に見るの外、已むを得ざる事
來厭世家流の如きは未だ悟り、自ら超然たる氣取りおぼしむ。如く
も、不親切と此の如きは未だ悟り、自ら超然たる氣取りおぼしむ。如く
た、非有非空の如きは未だ悟り、自ら超然たる氣取りおぼしむ。如く
左なき徒に小道實相を氣取るが如きは甚た取らざる所なり。世人哲

學者を以て仙人と云ひ、社會に不必要なるもの云ふも、右の如き
厭世家ありて、世に對して、吾獨り清りなり、トマン氏は自家獨り
し、此故に厭世家の張本たるハルトマン氏は自家獨り親切者と云
同胞に對して、當今の世に染みならず、以て衆生を濟度するの如
にありて、其俗塵に染みならず、以て衆生を濟度するの如く、市
方、今天下の勢之に趣かずして、彼を輕んじ、人情紙の如きも、
甚、揚し、は、律義者、を疎んじ、正直者は、輕んじ、人情紙の如
賞、揚し、は、律義者、を疎んじ、正直者は、輕んじ、人情紙の如
め、教を立つもの、は、亦得意になり、彼等は、役になり、氣取る
て、教を立つもの、は、亦得意になり、彼等は、役になり、氣取る
を、胃弱の現象と、孔孟主義を、指して、陳腐なりと、罵る、博
を、説く、花街、月光、文、天、影、の、句、を、な、さ、し、ひ、る、俗、僧、
流、る、株、主、を、欺、て、形、を、隱、す、惡、漢、あり、口、に、清、淨、を、唱、
り、其、局、主、を、欺、て、形、を、隱、す、惡、漢、あり、口、に、清、淨、を、唱、
澆、季、知、る、へ、き、の、親、睦、會、席、上、人、殺、し、あり、葛、を、發、く、の、
爲、去、津、亦、曰、く、我、見、世、間、人、茫、々、走、路、塵、不、知、此、中、事、將、
他、人、錢、蹄、穿、始、憫、我、見、世、間、人、茫、々、走、路、塵、不、知、此、中、事、將、
食、頭、車、善、七、と、穢、多、頭、團、左、衛、門、と、爭、ひ、善、七、敗、を、取、り、
濁

百
に及んで、其家來七兵衛なるもの主人に代て刑に逢へり、其辭世に「地獄にも木陰かあるか夏の暮」と。鳴呼當世の七兵衛たるもの幾何かある、世は進歩せりの開化せりの處と誇るも一乞巧の義に若かさるか、實に浩嘆に堪ふへけんや、感ずる處あり時弊數葉を認む、嗟吁。

明治廿四年五月廿九日印刷
明治廿四年五月三十日出版

版權
所有

著述兼發行人

東京市牛込區市ヶ谷仲ノ町十四番地

三宅雄二郎

印刷人

東京市神田區松下町十三番地

熊田宜遜

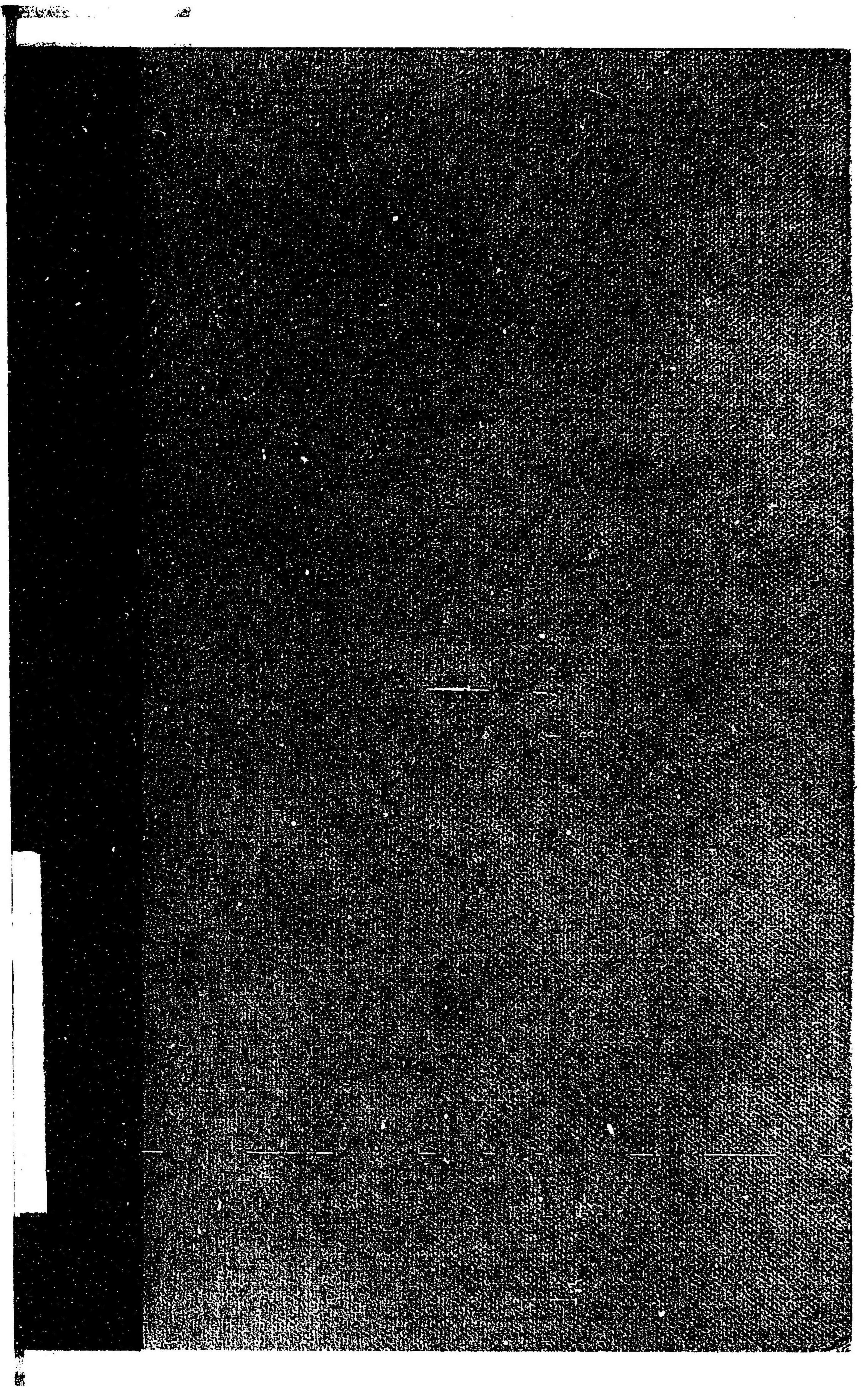
發行所

東京市神田區北神保町十一番地

政教社



I-38-82



22

332

偽悪醜日本人

国立国会図書館

202651-000-4

22-332

偽悪醜日本人

三宅 雄二郎 / 著

M24

EDF-0044



89